



三豊市弥谷寺の紅葉に光が差し込む。紅葉の花言葉「大切な思い出」のように、これまでの思い出もこれから作られる思い出も、光り輝いていますようにと想いをこめて。  
(医学部写真部 4年 小林由奈さん文・撮影)

# 讚 樹 會

令和4年9月1日発行

## CONTENTS

- 02 讚樹會会員数
- 03 同窓会長挨拶
- 04 同窓生教授就任挨拶
- 06 医学部教授退任挨拶
- 08 新任教授就任挨拶
- 10 第17回讚樹會定期総会開催報告
- 11 定期総会記念講演会
- 16 定期総会議事録
- 18 令和3年度会計報告
- 19 令和4年度予算
- 20 令和4年度・5年度理事一覧／組織図
- 21 功労賞表彰規程制定
- 22 ニュースの窓
- 24 理事会議事録
- 25 令和4年度 讚樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 26 小森秀雲先生を偲ぶ
- 28 関連病院紹介【高松平和病院】
- 31 国外留学助成金留学レポート
- 34 教室便り
- 45 編集後記／事務局からのお知らせ
- 46 TOPICS

発行 香川大学医学部医学科同窓会讚樹會  
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1  
TEL/FAX 087-840-2291  
E-mail mddousou@kagawa-u.ac.jp  
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 平川栄一郎  
編集人 谷 丈二  
印刷所 株式会社



## 讃樹會會員数

2022年8月現在

正会員	3605
大学院修了会員	8
特別会員	40
名誉会員	59
賛助会員	2
準会員	704
計	4418

※正会員数は卒業者数の合計です。



卒年別地域別正会員数 (卒業者数は卒業時の人数です。地域は不明者等を除いた現在数です。)

卒業年	卒業者数	九州	四国	(香川県)	中国	近畿	中部	関東	東北	北海道	海外
S61年	75	3	29	(25)	10	12	2	11	1	1	
S62年	89	2	28	(28)	9	21	2	16	1	1	
S63年	93	2	29	(19)	12	20	5	9	4		
H元年	102	8	27	(24)	7	26	6	14	1		
H2年	100	2	41	(38)	8	13	6	20	2		
H3年	106	3	39	(30)	6	25	12	8	4	2	
H4年	109	5	28	(25)	12	20	15	21		2	1
H5年	98	3	41	(36)	10	13	6	15		2	
H6年	86	3	26	(20)	7	15	14	15	1	1	
H7年	89	4	31	(26)	8	13	10	17	2	1	
H8年	109	7	34	(27)	10	23	9	20			
H9年	87	9	37	(26)	7	14	1	9		3	
H10年	91	7	23	(19)	11	18	14	13			
H11年	97	6	28	(26)	13	20	5	17	1	3	
H12年	98	6	37	(27)	10	17	4	19		2	
H13年	77	4	24	(21)	13	10	7	13	0	1	1
H14年	115	3	31	(26)	6	30	12	26	3	2	
H15年	92	3	25	(22)	10	17	8	23			
H16年	98	7	21	(20)	12	17	10	22	1	1	
H17年	100	8	25	(23)	9	23	6	21	0	1	
H18年	81	2	18	(13)	11	24	7	14		1	
H19年	93	8	23	(19)	10	20	5	18	1		
H20年	89	4	31	(28)	6	22	6	17	1	1	
H21年	90	8	22	(21)	12	15	5	22		3	
H22年	103	6	37	(35)	9	22	10	18			
H23年	97	4	34	(28)	13	19	4	19			
H24年	91	2	32	(31)	11	20	7	12			
H25年	96	2	31	(25)	14	23	8	15			
H26年	88	3	32	(25)	14	18	3	12	2		
H27年	99	2	32	(28)	17	24	8	14			
H28年	104	3	40	(38)	12	24	3	17		1	
H29年	111	2	52	(40)	17	28	2	8		1	
H30年	105	2	32	(26)	22	34	2	12	1		
R1年	118	3	46	(39)	24	25	3	14	2		
R2年	114	4	42	(39)	16	27	5	17		2	
R3年	101	3	36	(33)	14	30	4	11		2	
R4年	114	1	35	(28)	24	32	8	14			
計	3605	154	1179	(1004)	436	774	244	583	28	34	2

## 同窓会長挨拶

### 2期目の就任にあたり



平川 栄一郎（昭和61年卒・1期生）

この原稿を提出しようとした矢先に、ニュースの速報で安倍晋三元総理が凶弾に倒れたという訃報が飛び込んできた。この平和とされる日本ではありえない、あってはならないことが起きた。深い悲しみとともに追悼の意を捧げます。

以前、私は本会報に寄稿した中で、激しく流動化する社会情勢、国際情勢は日本の政治や経済活動だけでなく、日本社会のこれからのあり方についても大きな影響を与えてくることになるだろうと述べた。令和元年12月に中国武漢で発生したとされる新型コロナウイルス感染症は、世界中への感染拡大による未曾有の事態を招き、多くの死者と国民の行動変容や経済活動の停滞を引き起こした。そして、今年2月24日にはロシアがウクライナに侵攻を開始し国際社会を巻き込んだ衝突となり、人々は国際社会の分断と専制主義国家という新しい脅威と対峙することになった。今、世界でそして日本で悲劇的な出来事が起きている。あらためて、私たちはこれまで以上にしっかりと自分の足元を見つめ、着実に進んでいく自律した姿が求められている。

前段が長くなりましたが、先般5月14日に開催された讃樹會第17回定期総会におきまして、会員の皆さま方から多大なご信任をいただき、令和4年度・5年度讃樹會会長を引き続き務めさせていただくことになりました。誠にありがとうございました。再任にあたり、ご挨拶を申し上げます。

讃樹會は本年3月に第37期生の卒業を迎え準会員を含めて4000名を超える同窓会となっています。私は、讃樹會の3つの目的である「会員相互の親睦、母校の発展、学術の発展」に従い、引き続き大学運営や卒後臨床研修センター、国際交流への協力を行い、学術助成や留学助成、学会開催や支部会・同期会開催への助成を行い、また、女性の活躍の場を増やすなどの多くの事業に取り組んで参ります。昨年、医学部長に母校出身の三木崇範先生が就任されましたが、讃樹會執行部会には執行部役員とともに、毎回多くの母校出身の

教授が特別役員として参加していただいています。執行部会では、多くの先生方からご意見をいただき、その専門や女医としての立場からの発言をいただいています。これらの先生方と議論を重ね、地域医療への貢献や医学部の抱える卒後研修等の課題に対して、しっかりと連携をとりながら協力して参りたいと考えています。地域医療への貢献に関しては、副会長を中心にワーキングチームを立上げ、具体的な支援策を検討致します。また、卒業生のうち約2500名は香川県外の医療機関で活躍されています。香川県内はもとより全国で活躍する同窓生のために、讃樹會は支援を進めて参りますので、是非、皆さまの声やアイデアをお届け下さい。時代が激しく動いていく中で、様々な状況に対応できる同窓会を実現していく所存ですので、讃樹會会員の皆さまには益々のご理解とご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



## 同窓生教授就任挨拶

### 教授就任にあたって

#### －新たな挑戦の始まり－

日本医科大学大学院医学研究科 内分泌代謝・腎臓内科学分野

大学院教授 岩部 真人 (平成15年卒・18期生)

讃樹會会員の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。平成15年卒の岩部真人と申します。このたび令和4年5月1日付で日本医科大学大学院医学研究科内分泌代謝・腎臓内科学分野大学院教授を拜命致しましたこと、この場をお借りしてご報告、ご挨拶申し上げます。

これまでの私の経歴を簡単にご紹介させていただきます。私は、生まれも育ちも香川県で、実家の住所は、昔で言う香川県香川郡香川町です。入学時は外科医に憧れ、卒業後は臨床医として地元で貢献したいと思っておりました。ところが学部2年生の時に転機が訪れ、小林良二先生の研究室に出入りしたことをきっかけにScienceの世界に魅了され、徳光浩先生と一緒に参加した分子生物学会でPhysician-Scientistとして生きていくことを決心しました。学部5年生の時にこの学会でポスター発表した際に大変感銘を受けたことは、「君のやっている実験はどうなの」と多くの研究者が本気で真剣に私の話に耳を傾けてくれたことでした。それは学生に対する扱いでなく、研究者に対する扱いで、「Scienceの世界では、年齢や肩書き、所属大学ではなく、出したデータだけが評価される」ということを体感し、とても素晴らしい世界だと思いました。そして、卒業と同時に門脇孝先生が主宰していた東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科に異動しました。

当時の門脇研究室では、肥満（脂肪細胞の肥大化）に伴って、脂肪細胞から分泌される生理活性物質アディポネクチンが低下することが、メタボリックシンドローム・2型糖尿病激増の主因になっていること、一方でアディポネクチンを補充することがこれら病態の治療法になり得ることを研究成果として示していました。さらに、私が門脇研究室に異動した年に世界で初めてアディポネクチンの受容体（AdipoR）が同定され、個体レベルでのAdipoRのより詳細な機能解析が行われていました。現在、同教室を主宰されている山内敏正先生に一連のAdipoRプロジェクトを任せられ、

岩部（岡田）美紀先生とともに寝食を忘れ実験に没頭しました。教室のあらゆるマネジメント業務をこなさなければいけない今にして思うと、実験だけをしていれば良かったあの頃は、とても贅沢な時間であったようにも思います。筋肉や肝臓におけるAdipoRシグナルが低下することが、メタボリックシンドローム・2型糖尿病の主因になること（*Nature Medicine* 2007）、骨格筋におけるアディポネクチン/AdipoR1経路が運動模倣シグナルを有すること（*Nature* 2010）を明らかにし、さらに独自のAdipoR活性化薬スクリーニング法を駆使し、AdipoR活性化低分子化合物（AdipoRon）の取得に成功しました（*Nature* 2013）。AdipoRonは経口投与可能な低分子化合物で、実際に生体内でAdipoRを介して、糖・脂質代謝を改善します。さらに非常に重要なポイントは、このAdipoRonは生活習慣病モデルマウスの短くなった寿命を延長することが明らかとなっており、先制医療のコンセプトではなく、確かな手がかりとして、健康長寿に資する画期的な新規生活習慣病治療薬として期待できると考えています。さらにAdipoRの立体構造を明らかにすることにも成功し（*Nature* 2015）、現在はAdipoRonを含めて、得られている化合物群（First-in-class）のヒトへの最適化（Best-in-class）を行っており、近い将来、世界初・大学発の新規糖尿病治療薬・健康長寿薬として、臨床応用されることを目指して、研究を展開しております。

そのような折りに、機会にも恵まれ日本医科大学に異動することになりました。日本医科大学は、1876年に長谷川泰先生により創設された済生学舎を前身とし、医師の早期育成を目的として設立された創立140年を超えるわが国最古の私立医科大学です。これまでに多数の医師、医学者を輩出しており、その中には世界的な細菌学者である野口英世先生、小口病の発見者である小口忠太先生など現代の医学界にも名を残す偉人が含まれています。1910年に現在の東京都文京区千駄木に付属病院が開院されて以来、キャンパスは千駄木に

あります。立地的には東京大学と隣接しており、幸いにも私の通勤時間は徒歩で30秒から自転車で10分に変った程度です。この地を舞台として私の新たな挑戦が始まります。

日本医科大学では医学研究科専攻分野の改組により、内分泌糖尿病代謝内科学分野と腎臓内科学分野は合流し、新たに内分泌代謝・腎臓内科学分野としてリニューアルすることになりました。従来、内分泌学、代謝学、腎臓学は、ホルモンを中心にした全身の恒常

性（体液の量・電解質・浸透圧・pH、血糖などの栄養素、血圧・血流、体温、成長、エネルギー代謝、性周期など）維持機構を明らかにする学問であり、これらの学問領域が融合されることによって、生命体をさらに統合的に広く深く理解することが可能となってきます。内分泌代謝・腎臓内科学分野は、「全身を診る診療科」を合言葉に、「恒常性（ホメオスタシス）を制御し健康長寿社会を実現する」ことを共通のミッションとして掲げ、教育・研究・臨床そして運営に至る全ての活動に対して、教室員一丸となったone team体制で臨みます。全身の恒常性を学ぶことに主眼を置いた教育（講義・実習）により学生の医学・生命科学への理解はさらに深まります。ホルモンをキーワードにした分野融合型の独自性・創造性の高い研究は未来の医療を生み出します。健康長寿社会の実現を目指した全身を診る診療科のスタンスはさらに質の高い医療を提供します。また、新専門医制度においても、内分泌代謝・腎臓内科学分野の診療体制では、複数の専門医を取得することが可能です。内分泌代謝学、腎臓内科学におけるスペシャリストの養成だけでなく、これからの時代にまさに求められている複数の専門医を修得した全身を診る診療医を多く輩出し、社会的要請に応えていきます。

また教室運営におきましては、教室員それぞれの願いや想いを最も大切に、全ての教室員が温かい心を持って互いを尊敬し合い、助け合い、全力で仕事に取り組める環境を構築したいと思っています。そして、全ての教室員が誇りを持てる内分泌代謝・腎臓内科学分野を教室員とともに築き上げていきます。個々の力、スモールグループでは乗り越える事が出来ない医学分野の世界的課題に対しても教室員一丸となって挑みま



す。目の前の患者さんに最善の医療を提供するだけでなく、未来の患者さんを救うために、終わりなきScienceの発展に挑戦していきます。私達のチームに加わってみたいと思って下さる方がいましたら、是非とも気楽に声をかけて下さい（m-iwabu@nms.ac.jp）。

一緒に未来の医療を創造しましょう。

さいごとなりますが、長年にわたって陰になり日向になり温かいご指導・ご支援を賜りました関係する全ての方にこの場をお借りして心より厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございます。香川から離れた関東の地ではございますが、香川大学医学部の益々の発展に全力を尽くす所存でございます。引き続きご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 略歴

平成 15 年	香川医科大学医学部医学科卒業
平成 15 年	東京大学医学部附属病院医員（研修医）
平成 16 年	河北総合病院医員（研修医）
平成 21 年	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻 博士課程修了
平成 21 年	東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科 特任助教
平成 25 年	独立行政法人科学技術振興機構 さきがけ研究員 兼任
平成 27 年	東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科 特任准教授
令和 2 年	東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科 講師
令和 3 年	東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科 准教授
令和 4 年	日本医科大学大学院医学研究科 内分泌代謝・腎臓内科学分野 大学院教授

## 医学部教授退任挨拶

### 35年間の大学勤務を顧みて



香川大学名誉教授

峠 哲男

令和3年3月で香川大学を定年退職いたしました峠でございます。

私は昭和56年に徳島大学を卒業後、大阪府立病院、社会保険栗林病院にて臨床研修を行った後、昭和60年から開院当初の香川医科大学医学部附属病院第三内科（現在の消化器・神経内科）の所属となり、35年の長きにわたり香川医科大学及び香川大学において勤務いたしました。その間、お世話になりました先輩、後輩の方々、および医療スタッフの方々にはこの場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

私の医師としての経歴をたどってみますと、私は学生の頃より神経系に興味があったため、専門分野として神経内科（現在は脳神経内科と改称）の道に進みました。当時は、まだMRIも開発中で、遺伝子診断や免疫学的診断法もない時代でしたので、神経内科の病気は神経学的診察による診断が難しい、診断がついても治らない、治療法がないというのが一般的認識でした。そのため私のような出来の悪い人間が神経内科を専門にして果たしてやっていけるだろうかという疑問に思いましたが、研修医時代に筋萎縮性硬化症や多発性硬化症の患者さんを受け持つ機会があり、何とか難病の人たちを助けることはできないだろうか考えるようになったのが、神経内科を選んだきっかけでした。

香川医科大学第三内科に入局後は、研究を行って学位をとることをまず目標にしました。最初は先輩の動物実験の手伝いをやっておりましたが、上司の勧めもあって臨床研究を行うことにしました。一般的にあまり知られていませんが、正常人には長潜時反射という反射があり、この反射が脊髄小脳変性症や筋萎縮性側索硬化症でどのように変化するかを調べたのが私の学位論文です。この論文自体は殆どインパクトがありませんでしたが、長潜時反射が異常に亢進する皮質反射性ミオクローヌス（筋けいれん的一种）という疾患があり、そのメカニズムを調べるために動物実験モデルを作成して基礎的研究を行いました。この研究がきっかけとなり私の研究対象はパーキンソン病を含めた運動異常症の研究へと移って行きました。

平成3年に英国ロンドン大学神経研究所のC.D. Marsden教授に、「留学して先生の教室で研究をやらせてもらえないか」と直接手紙を出したところ、OKを頂いたので留学いたしました。ちなみにMarsden教授の名前が入った論文発表数は年間300程で、当時世界第2位でした。平成12年に同研究所に再留学し、帰国後は脳の磁気・電気刺激による神経疾患の治療法に関する研究を継続しました。また、私が専門とする臨床神経生理学では医学と工学の研究者が協力して研究を進めることが必須だと痛感し、国際複合医工学会の設立や運営にも携わりました。平成16年からは師匠である竹内博明先生のご尽力もあり香川大学医学部看護学科健康科学の助教授になり、平成18年から同教授、平成28年から組織改編により香川大学医学部医学科健康科学系健康科学教授となり、令和3年に定年退職いたしました。現在は香川大学の客員研究員、非常勤講師と香川大学医学部附属病院の診療協力医を務めております。

以上、私の研究の動機や変遷について述べさせて頂きました。近年の神経疾患、特に脳血管障害や神経免疫疾患の治療法の進歩には目を見張るものがあり、神経疾患は治らないという時代は終わったのかと思えるほどです。また再生医学や遺伝子工学の進歩が神経難病に対して新しい治療法をもたらすものと思います。しかしながら筋萎縮性側索硬化症やパーキンソン病、アルツハイマー病などの神経変性疾患を直すことができる治療法はまだありません。今後、私がこのような疾患の研究に直接携わることはありませんが、若い先生方のご活躍に大いに期待したいと思います。

最後に、私のこれからの計画といたしまして、香川県内の複数の病院に非常勤医として勤務させていただき、神経疾患の実地診療に努めてまいりたいと思います。香川大学医学部附属病院と同じような診療が香川県内のどの地域でも受けられるように、脳神経内科医療の均てん化を目指すことが目標です。そのためには、讃樹会会員の先生方のお力をお借りしなければなりませんので、ご協力の程をお願い申し上げます。

## 退職のご挨拶と讃樹會への御礼



香川大学名誉教授

山本 哲司

この度令和4年3月末をもって香川大学医学部整形外科学講座を退職させていただきました。定年退職まで2年を残した早期退職となりますが、それでも17年間の長きに渡り、香川大学の臨床・研究・教育に携わる機会を与えていただきました。この間、讃樹會の先生方には整形外科の教室運営に多大なご協力を賜り感謝しております。

赴任当初は出身大学である神戸大学と香川大学の医局の運営方法が全く異なり多くの点で驚きました。同門会組織そのものが存在しないと聞かされ衝撃を受けました。赴任後、医局の事務の方や医局長その他年配の医局員の記憶と古いメモをもとに同門会員名簿を作成し、他大学の同門会規約を参考にして同門会規約の原案を練り平成18年1月に同門会総会の開催にこぎつけました。また翌年には完全とはいえなくても同門会誌の第1号を発刊することができました。赴任後の1年間は医局のスケジュール管理とこの同門会の組織作りが大きな仕事となりました。私の退任後は次期教授とともに同門会組織を大きく発展させていただきたいと医局員には重ねてお願いしております。

卒前教育に関しては系統講義と実習カリキュラムの編成の変更を行いました。なんとか整形外科の実習を学生に印象付けたいと考え、医局員のアドバイスをもとに、2週間の実習の中の1日をハンセン病患者さんの診療に携わる大島青松園での学外実習にあてることにしました。これはハンセン病の医療と整形外科全般の医療が大きく結びついているわけではありませんが、必ず整形外科の学生実習の記憶に残ると考えて決めました。残念ながらコロナ禍の影響で令和2年に中止になりましたが、私の赴任後の香川大学医学部卒業生は15年間にわたりこの学外実習を経験し、整形外科の実習といえば大島青松園を思い出すことなのでしょう。学生には実習ごとに感想文を提出してもらいましたが7割の学生が大島青松園のことについて触れていました。

もう一つのアイデアは、折しも始まった新臨床研修制度開始直後の大学離れによる入局者の減少に対して、整形外科医の魅力を伝えることを主な目的として始め

た「スポーツ実習」であります。6年生の選択実習（スーポリ）の最後の週に合わせて開催される学会に学生を一泊二日で参加させて、学会参加の後に甲子園での野球観戦を中心とした「スポーツ実習」を行うものであります。これがどれほど新入医局員獲得に効果があったかは不明ですが、整形外科の臨床実習の印象付けに役立ち、医局員と学生との親睦を高めたことは間違いないと思います。

香川県内の病院には今でも近隣の大学や四国以外の医学部出身の整形外科医が多数診療に携わっております。私を含めた香川大学整形外科をそれらの方と結びつけていただいたのは香川県整形外科医会と讃樹會の先生方でした。学会や研究会以外にも香川県の整形外科医療に関する様々な会合にお招きいただき懇親の場を与えていただき、また県内の医療体制について多くのご指導をいただきました。

学会活動としては第48回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会を終えたことや、WEB開催となりましたが第136回中部日本整形外科災害外科学会を無事に開催することができました。これも讃樹會の皆様のご指導とご協力の賜物と深く感謝しております。今後も香川大学整形外科学教室と讃樹會の先生方の益々のご発展とご健勝を心より祈念いたします。

## 新任教授就任挨拶

### 教授就任にあたって

#### 心と身体に優しい外科医療の実践を目指して



香川大学医学部  
呼吸器・乳腺内分泌外科学 教授

矢島 俊樹

2022年4月1日付けで香川大学医学部 呼吸器・乳腺内分泌外科学の教授を拝命致しました矢島俊樹と申します。讃樹會の皆様方にご挨拶させて頂く機会を頂戴し、心より感謝申し上げます。

我々の講座は、昭和58年に初代教授として前田昌純先生が赴任し外科学講座第二外科学として開講されました。平成11年から二代教授として横見瀬裕保先生が引継ぎ、平成18年より教室名が呼吸器・乳腺内分泌外科学となりました。このたび私が三代教授として着任し、これまで築いてこられた伝統を継承し、更に発展できるよう努力して参りたいと考えております。

私は、長野県小諸市の生まれで地元の野沢北高等学校を卒業し、群馬大学に入学しました。クラブ活動では中学から大学までサッカー部に所属し、基礎体力と粘り強い精神力を身に付け、更にチームワークの重要性を学べたことは、私の外科医としての礎となったと考えております。平成9年に群馬大学第一外科に入局し、大学病院と関連病院で呼吸器、消化器、乳腺内分泌、小児など幅広く外科の基礎を学びました。3年目に大学院へすすみ免疫の基礎研究を行い、3年間は名古屋大学生体防御医学研究所で、その後、助教として3年半九州大学生体防御医学研究所で多くの大学院生の指導を行いました。その後、群馬大学に戻り臨床は呼吸器外科に特化し行い、平成30年から先端腫瘍免疫治療学講座の責任者を拝命し、呼吸器外科のチーフとして臨床を行いながら腫瘍免疫の基礎研究を行う二刀流を実践してきました。このように臨床・研究・教育の機会を継続的に与えて頂いたことが、今回このような重要な立場を頂けることにつながったと考えております。今後も教室員と共にこの二刀流を継続できるよう取り組んで参ります。

当講座の呼吸器外科では、肺癌を中心に転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、膿胸、胸壁腫瘍を含めた胸部疾患の診療にあたっています。肺癌は本邦におけるがん死の第1位で、さらに増加傾向であり、その診療の重要性は高くなっています。大学病院の使命として、早

期がんに対しては高度な技術を用いた低侵襲手術を、進行がんに対しては根治を目指した拡大手術を共に発展できるよう努めていきます。近年、画像技術の進歩に伴い小型肺癌に対する手術症例が増え低侵襲手術の必要性が高くなっています。これまで標準術式は「肺葉切除」のみでしたが、その患者さんは一般にご高齢で、さらに喫煙により低肺機能の方も多く、身体に負担の少ない手術が望まれます。2021年の臨床試験の結果、2cm以下の小型肺癌では呼吸機能温存が可能な「肺区域切除」が適応となることが想定されます。しかしながら、「肺区域切除」は「肺葉切除」と比較し、複雑な操作が必要であり技術的難易度が高いことが課題です。特に胸腔鏡下に行うことは難しく、多くの施設では開胸で行ったり、操作が比較的単純な一部の区域に限定し行っています。私は、これまで幾多の創意工夫を重ね、全国的にも類をみない「全ての区域に対する胸腔鏡下肺区域切除」を標準化できる方法として確立し報告してきました。これにより、病変の部位によらず呼吸機能温存が可能な手術ができ、さらにこれまで手術困難であった多発肺癌や低肺機能の患者さんに対してもQOLを保ちながら根治手術を行うことができます。今後、香川大学からこの究極の低侵襲手術を世界に向け発信していきたいと考えております。

進行がんに対する拡大手術については、根治の可能性をあきらめることなくその治療に積極的に取り組んでいきます。大学病院の特徴を生かし大血管浸潤例では心臓血管外科、広範囲の胸壁欠損を伴う手術では形成外科、食道浸潤例や大網充填が必要な手術では消化器外科、切除可能境界域の症例に対しては術前化学療法を内科と連携し行っています。ただし、それらの手術はリスクが高いことも多くその適応は慎重に判断する必要があり、呼吸器外科だけでなく、呼吸器内科、放射線治療科、放射線診断科が参加する呼吸器Cancer Boardで十分討議し最適な治療法を選択するように努めて参ります。

当講座で扱うもう一つの悪性腫瘍である乳癌は、本

邦の女性罹患率第1位で増加傾向であり、こちらもその診療の重要性は高くなっています。乳腺内分泌外科の発展も私に課せられた使命であり、スタッフと力を合わせその診療を推進できるよう取り組んでいきます。

また、教育も大学病院での重要な役割であり、学生の指導および若手外科医の育成に力を入れて取り組んでいきます。学生教育では外科の魅力を積極的に伝え、若手外科医には一流の外科医へと導くための教育を行い、香川県外科医療の未来を託せる人材を育成していきます。

最後になりますが、呼吸器・乳腺内分泌外科学の教室運営を通して、香川大学の発展に貢献できれば、この上ない喜びであります。讃樹會の皆様方におかれましては今後、御指導・御支援頂けますよう、宜しくお願い申し上げます。

## 略歴

平成9年3月	群馬大学医学部卒業
平成9年6月	群馬大学第一外科 研修医
平成10年6月	鶴谷病院外科 研修医
平成11年4月	群馬大学大学院 入学、名古屋大学生体 防御医学研究所 研究生
平成14年3月	群馬大学大学院 修了
平成14年4月	九州大学生体防御医学研究所 助手
平成17年9月	群馬大学総合外科学講座 助教
平成20年4月	伊勢崎市民病院外科 医長
平成23年4月	公立藤岡総合病院外科 医長
平成25年4月	群馬大学総合外科学講座 助教
平成30年10月	群馬大学総合外科学講座 講師
平成31年4月	群馬大学先端腫瘍免疫治療学講座 准教授
令和4年4月	香川大学医学部 呼吸器・乳腺内分泌外 科学 教授

## 第17回讃樹會定期總會開催報告

開催日時：令和4年5月14日（土）

開催形式：オンライン開催（Cisco Webex）

配信会場：医学部特別応接室（管理棟3階旧学長室）

15：30～16：20 総会

16：30～17：30 記念講演会

講師：三木崇範先生（6期生 香川大学医学部長）

演題：「出会いを生きる」

懇親会の開催はありませんでした。



第17回讃樹會定期總會は、COVID-19の感染者数減少の見込みが未だ難しい状況であることから、総会としては初めてオンライン開催されました。医学部管理棟3階の特別応接室（旧学長室）を中継本部として、令和4年5月14日（土）15時半から、全国の参加者に向けて総会が配信されました。

前年度同窓会長平川栄一郎先生（1期生）によって開会宣言が行われ、引き続き議長を務めて議事が進行しました。会長選挙につきましては、信任投票の結果に基づき、平川栄一郎先生の会長再任が決定しました。理事選挙につきましては、投票者の信任を受け、各卒年に1～2名ずつ計67名が今後2年間の理事として決まりました。

2期目を就任された平川会長による所信表明に続き、同窓生教授就任の報告、令和2年度・3年度の事業報告が行われました。次に、令和3年度決算報告及び監査報告、令和4年度予算案の審議が続き、今回発案された功労賞表彰規程案の承認、シンボルフラッグデザイン案が最終決定され、全ての議事の審議・承認が無事に終わりました。報告及び議事の内容につきましては、後述の総会議事録を参照ください。

総会后、引き続き記念講演会が開催され、卒業生初の医学部長に就任された三木崇範先生（6期生）を講師にお迎えし、「出会いを生きる」の演題でご講演いただきました。ご講演内容を三木先生にまとめていただきましたので是非お読みください。（次ページ）

質疑応答では、学生時代にしておいた方が良かったことなど、現役の学生さんへのアドバイスはという問いに「自由にいろいろなことをやってほしいのですが、その中でも一つは読書。もう一つは、医学部の勉強は大変多く難しいですが、一つでよいので得意な科目、好きな科目を作っておけば、自己肯定感に繋がりその後の支えとなります。」というお答えをいただきました。

講演終了後も、全国からWEB講演会に参加された方々との画面越しの会話に花が咲き、オンラインならではの実感できる中、和やかに閉会となりました。

### 讃樹會第17回定期總會 式次第

- 一、開会宣言
- 一、議長任命
- 一、会長選挙・理事選挙 開票結果報告
- 一、会長所信表明
- 一、令和2・3年度事業報告
- 一、令和3年度決算報告及び監査報告
- 一、令和4年度予算案承認の件
- 一、功労賞表彰規程制定の件
- 一、讃樹會シンボルフラッグ作成の件
- 一、その他
- 一、閉会宣言



医学部旧学長室から配信を行う執行部



三木崇範医学部長（右上）による記念講演会  
右下は座長を務める平川栄一郎会長

## 定期総会記念講演会

《令和4年5月14日 オンライン配信》

### 讃樹會第17回定期総会記念講演 出合いを生きる

香川医科大学 平成3年卒・6期生 三木 崇範

香川大学医学部 医学部長  
神経機能形態学 教授



(当日のご講演スライドとテキストを編集して掲載させていただきました。)

令和3年10月から医学部長の任に就きました。

香川医科大学、香川大学医学部を通じて、初めての母校出身の医学部長となります。これまで、同窓会をはじめ多くの同窓生が母校出身の教授を輩出することを目標としてきました。しかし、母校出身の医学部長として選ばれたことを嬉しく思います。

#### 教育方針

- 自由な学風の中で、
1. 医学生としての道徳観や倫理観の醸成
  2. 自ら学び物事の理に迫る学修を展開
  3. 国際人としての資質の涵養

信頼関係を構築し、愛校心を育む

医学部長として、学生の教育方針として三つを掲げました。第一に医学生としての自覚と道徳観醸成、第二に本質に迫る学修姿勢、第三に

異なる意見や考えを受け入れ寛容な姿勢の涵養です。結果として、教員と学生の信頼関係が構築でき、愛校心が育める学修環境をつくるのが目標です。

#### 解剖学の教員として

1. 人体の構造と機能を教授
2. 実習を通して学ぶ  
人間性 HUMANITY を育む教育  
「道徳教育・精神教育」

解剖学を担当する教員としての自覚と責任感  
独自の教育観を展開

教育では解剖学を担当しています。教員になってから今日まで、系統解剖を担当する教員として重視してきたのは、実習を通じてしか学

べない医学生としての自覚や道徳観の醸成です。医療人として最も大事なことを、豊かな人間性 Humanity を備えていることと位置付け、すべての人を愛おしく想える心が涵養できる解剖学教育を実践しています。本学ほどこの点に注力した教育をしている大学は数少ないのではないかと自負しています。これが私の教育観でもあります。

#### これまでの道 1. 医学部への道

医学部に進学しようと思った経緯についてお話しします。

医学部には、叔父が医学部に進学していたので憧れがありました。当然ながら、何時の世も国立大学医学部への道はそう簡単なものではありませんでした。「憂き事のなほこの上に積れかし限りある身の力試さん」(山中鹿之助)。この時に自らにはこの言葉を戒めとして課していました。自らを律する言葉です。いま振り返ってみると、今日でも継続して自らを律し続けていたようにも思えます。これは同窓の先生方も同様だと思っています。浪人の後、昭和60年に香川医科大学に入学して、平成3年に卒業しました。



卒業記念碑

#### 2. 基礎医学研究者—アカデミアとして歩む道

大学に身を置いて、基礎医学の教員をしていると、いずれは昇進の時が訪れます。昇進とは教授選です。教授選にあたっては、同級生が自分のことのようにサポートしてくれました。

同期の内山順造先生や秋山正史先生が、全同級生に私たちへの応援を依頼してくれました(私たちの研



平成3年卒業第6期生同窓会

究業績を参考文書に入れて)。また、鴨田匡史先生からは、2回目の年賀状として応援の便りをもらいました。これはいまでもフレームに入れて教授室に飾っています。

私たちの同期はこのような学年です。恐らく、ここまでして貰える同窓生は数少ないものと思っています。改めて、この3人の先生方を始め同窓生に感謝します。

このようなサポートがあり、日下 隆先生と私は、同じ年に教授になれたのです。

### 3. 医学部長立候補への道

医学部長選挙に立候補した経緯についてお話しします。

立候補した経緯は、ここに示した通りです。これまで数年間、副医学部長として

医学部の運営に関わってきましたが、今以上に香川大学を発展させて躍動させるために、本気で取り組めるのは卒業生しかないという思いから立候補を決意しました。ここには、日下先生の強い勧めがありました。

私自身は、全同窓生の代表として、医学部をもっと良くしたいという思いだけで立候補して、幸いにして医学部長の任に就きました。出世欲や名誉欲など皆無であることを誓います。これまで、様々な所で気になる所や改善すべきところが目についていても、それを修正できる立場になれば実行が難しいところがありました。ところが今は、それらの意見を反映させることができ、在学生から徐々に変わってきている旨の声が耳に入るようになり、やり甲斐を感じています。

立候補に際して多大なサポートは、同窓の先生方から頂きました。同志です。星川広史先生（5期生）、日下 隆先生（6期生）、木下博之先生（7期生）です。現在もずっと協力してやってきています。信頼できる仲間恵まれたことに感謝しています。

\*\*\*\*\*

今回の記念講演会は、「出会いを生きる」という壮大なタイトルとしました。

出会いと生きること2つに分けて考えてみます。

まずは、出会いについて。人生は「出会う」ことから様々な薫陶を受けると考えています。私たちが薫陶を受けるには、受け手の私達も感性を研ぎ澄まして準備しておかなければならないと考えられます。

「人との出会い」と「物との出会い」について考えてみます。

—生きることの意味—

英語では、LIFEと表記します。しかし日本語では、

1) 生活、2) 人生・生涯の2つの意味があります。

生活のLIFEは、いい車に乗る、高価な時計をする、豪邸に住む、いい衣装を纏う、裕福であるなど、他人と比較できるものを指します。一方人生・生涯の意のLIFEは、その人独自の人生観や営みを指し、他人と比較できるものではありません。当然ながらここでは、後者のLIFE、つまり人生・生涯を生きるこの意味について私の想いをお話します。

「私の想い」



この写真は令和3年度の臨床実習開始式（私の講座で研究している4年生次生、日下 隆教授（学務委員長）と共に）です。教員と学生が一丸となって進む意気込みを感じて下さい。一方、下段は当講座の教員と学生さんです。基礎医学研究に興味を持って通ってくる学生が大勢



います。彼らの知的好奇心や探求心に応えられる教育指導を実践しています。香川大学医学部が将来に向けて飛躍するには、

人材の育成が重要です。そのためには教員と学生が信頼関係で結ばれていなければなりません。このような地道な努力は必ず実ると信じています。

—一人以外の出会い—

私の趣味は、古いものを観察すること、古いもの好きです。特に、古い建築物には大変な興味があります。いくつかの例をお示しします。

淡路島の八幡神社。



八幡神社

屋根の形が感動的です。勾配や反りの加減が絶妙で、大きな鳥が翼を広げて今にも飛び立とうとしているようです。古の職人の技術に感服します。形態学を研究基盤とする私には、この美しさが特別に映ります。

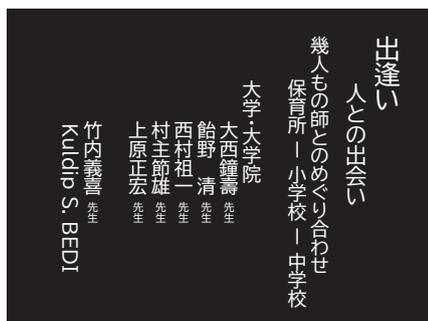


三島神社（愛媛県）

これらの古の建築物から受ける薫陶は、心を込めて取り組むことの重要さです。私にとっては、心を込めて教育や研究に取り組むことです。「自らの生き様を仕事に込める」ことが如何に大切かを改めて認識しました。

基礎医学研究者として、論文を書く際に筋を通してきたことがあります。研究結果は、質がいいものからそうでないものがあり、それに応じて投稿論文のランキング（例えばインパクトファクター）を決めます。私がこれまで例外なく守ってきたのは、これらの高低に関わらず、心をこめて論文を書いてきたことです。特に、Introduction や Discussion の箇所は、丁寧に、丁寧に心を込めて書いてきました。これは、査読者にも伝わるのかマイナーリバイスを経て、ほとんどアクセプトされてきました。私にとってはこれが、生き様を仕事に込めるということです。

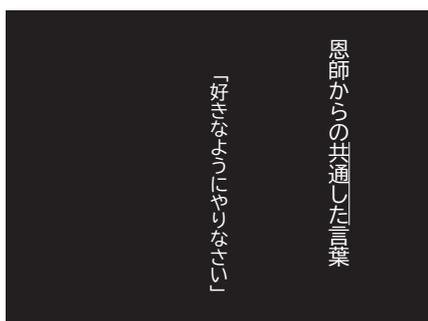
#### 一人との出逢いー



慢です（今はコロナで制限されています）。

香川医科大学、香川大学医学部を通じて、特に印象深く薫陶を受けた先生方をご紹介します。

大西鐘壽先生と鮎野 清先生は、鬼籍に入られてしま



これまで、幾人もの師と巡り合うことができました。幸運なことです。小学校の担任の先生とも、今でも会食したり交流していることも自

言いました。この講演を聞いてもらいたかった先生方です。

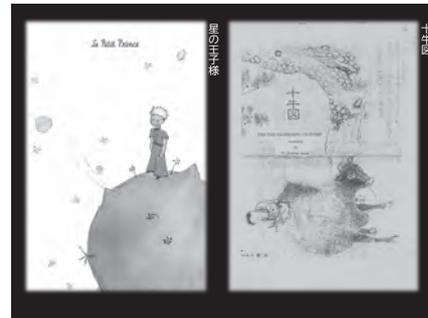
西村祖一先生、村主節雄先生、上原正宏先生、竹内義喜先生、そして留学先の

Kuldip S. Bedi先生からは、格別に感化されました。

医学部長に決まった時に、恩師からの共通したお言葉は、「卒業生なのだから、好きなようにやりなさい」でした。

西村祖一先生は、わざわざ医学部長室においでになり、このように言って下さいました。あまりの嬉しさに胸にこみあげてくるもので涙を流してしまいました。

インパクトのあるお言葉を頂戴したと思っています。私への激励と受け止めました。改めてお礼申し上げます。



英語教授の西村祖一先生からは、特別な薫陶を受けました。

講義で使った「星の王子様」と「十牛図」です。

星の王子様は、大切なものは目に見えないというフレーズが印象的です。十牛図は、悟りに至る過程を示してくれました。若かった私たちには示唆に富むものでした。十牛図の資料は、当時のものを大切に保管しています、これはその資料から作りました。中を見るといろいろな書き込みをしていました。この教材に心惹かれた証です。

これらの教材で共通していることは、本物を求めることの大切さです。英語の講義でありながら、道徳教育であったように思います。まさにリベラルアーツです。西村祖一先生とは、家族ぐるみでおつきあいしております。



神経機能形態学の前教授竹内義喜先生です。

平成3年4月に大学院生となり、それ以降長きに亘ってご指導を受けました。自由に伴い自己

責任が付随することについての認識が自然と身に付きました。些細な指導ではなく、方向性を示すだけで、自由に研究させてもらいました。この研究スタイルは現研究室の方針として継承しています。感謝しています。

文部省の長期在外研究員としてオーストラリア ブリスベンのクィーンズランド大学に留学しました。

約3年間の留学でした。Bedi先生夫妻が高松に来られた際の写真です。



留学することの意味について考えます。

留学することで、研究成果が上がることや英語が上達する、異文化を理解できたなど様々なことが言われます。しかしながら大学に身を置く者にとっては、このような次元のことでなく、もっと高次元のことを学ぶ機会が留学です。

日本人の場合、さして英語が流暢なわけではありません。私自身もそうです。

大切なのは、こちらが留学生として一生懸命、真面目に研究してボスに認めてもらうことだと思っています。これは英語ができる、できないに関わらず、心を通じ合わせることです。そうすると信頼関係が構築され、可愛がってもらえるようになります。

このような経験をして帰国した後、本学に海外から留学してくる学生さんに自ずと配慮してあげることができます。自分が留学した時に受けた恩は、その時のボスに直接返すことはできませんが、日本に留学してくる学生さんに返すことで恩送りができます。このような正の連鎖を生じさせ、それを次世代に繋ぐためにも留学は必須だと考えています。大学に身を置く者にとって、留学は自利ではなく他利のためでなければなりません。

\*\*\*\*\*

次に心に残る学生さんについてお話しします。

長い間教育に関わっていると心に残る学生さんがいます。

解剖学や生化学など基礎医学の科目で大変な時期に、相談に乗ってあげた学生さんから、卒後にご挨拶の品をいただくこと



があります。写真のお菓子は、「現在私がこうやってお医者さんができているのは三木先生のお蔭です」と言ってくれた卒業生から頂きました。毎年、夏と冬に挨拶に来てくれます。本当に嬉しく、ここで紹介しています。同様に右は、数年前に卒業時に挨拶に来てくれた学生さんからいただいたお菓子です。苦しんでいた時のアドバイスに対してのお礼が書かれています。

私としては、教員としてできることを当たり前に行っているつもりですが、このように思って貰えることに感謝しています。医学部長の任についてこの信念を一層強くしました。一人一人が大切な香川大学医学部の学生さんという意識で教育し優れた医師を輩出する覚悟です。

一方、修業年限を過ぎて大学を去って行った学生もいます。断腸の思いです。最近、2人のかつての学生さんの状況を知る機会がありました。医学の道ではありませんが違う道でしっかりと社会に役立つ仕事をしていることを聞いて嬉しく思いました。

これまでの私の人生を振り返ると、その時々で、幾人もの師に巡り合って、感化され薫陶を受け、更に目上の人に引き上げて貰ってここまで来ることが出来ました。

私自身、今の身の上に感謝しています。職位ではなく、同じ志で同じ方向を向って進む同志に恵まれている身の上に感謝せずには居れません。

改めて想うと、今の幸福な状況は決して自ら勝ち取ったものではなく、偶然に与えられたものと感じています。まさに、セレンディピティです。

感謝と向上心を忘れなければ、セレンディピティに恵まれると信じています。

私のこれからの生き方は、「妙好人として生きる」ことです。妙好人伝説というのがあります。自分の田畑に肥料を播きに行く途中、他人の畑がやせていたらそこに肥料を播いてあげる、つまり自分のことよりも



他人のことを先に心配して自分にできることをしてあげる人を妙好人と云います。その妙好人になりたいと思います。

私の家族をご紹介します。いい家族に恵まれことも、出逢いの一つと言えます。多くの人に、幸せそうで理想的な家族として羨ましがられることが自慢です。



学会や講演会の最後には、「星の王子様に誇れる研究」と締めくくっている最後のスライドです。

今回は、「星の王子様に誇れ

る生き方」で締めくくります。

ご清聴ありがとうございました。

これまで支えてくださいました多くの方々に感謝するとともに、末永くご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



## 定期総会議事録 第17回定期総会 令和4年5月14日(土)15:30~16:20

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、WEB開催となる。(Cisco Webex meetings)

また、WEB会議のセキュリティのリスクと参加者本人確認は行わないことから、公正な議決方法として、提出された636名の委任状をもって本総会の議決権は議長に委任されるものとする、ただし議案ごとに参加者からチャットでの意見を募ることが議長より説明された。

### 1. 開会宣言 (前年度会長 平川栄一郎氏 (昭和61年卒))

委任状による636名の参加となり、正会員(3443名)の10分の1以上を満たし総会が成立する旨の宣言が行われた。

### 2. 議長選出

WEB開催のため簡略化し、平川前会長が議長を務める。

### 3. 選挙開票結果報告

会長選挙は、平川栄一郎氏への信任投票となり、3月31日までに届いた郵便投票636票のうち、信任620票、不信任2票、白票14票、無効0票という結果により、平川栄一郎氏が再任した。

理事選挙は626票の投票のうち、信任625票、不信任1票、無効3票という結果となった。会員の有効投票数の過半数の信任票であることが確認され、令和4年度・5年度理事が決定した。

4. 会長所信表明 再任された平川栄一郎会長による所信表明が行われた。

### 5. 令和2年度・3年度事業報告

安田真之事務局長(平成9年卒)から令和2・3年度同窓生の教授就任祝賀報告の後、過去2年間の事業活動が報告され、承認された。

#### 【学術局】

##### ●研究助成金事業

###### 令和2年度(第16回)

研究助成金 人見浩史(平成8年卒)

研究奨励金 藤井喬之(平成22年卒)

###### 令和3年度(第17回)

研究助成金 平井宗一(平成14年卒)

研究奨励金 千代大翔(平成22年卒)

##### ●国外留学助成金事業

令和2年度 福長健作(平成21年卒)

令和2年度 岡崎智哉(平成23年卒)

上記2名に交付が決定したが、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、2名とも留学中止となり、助成金交付はなくなった。

##### ●講演会事業

令和2年度 第11回市民公開講座 高松市11月

令和3年度 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催中止となる。

##### ●学会助成金事業

令和3年度採択(翌年開催)2件

▶2022年アジア太平洋肝臓学会シングルトラックカンファレンス高松

▶第7回腎移植内科研究会学術集会

#### 【教育研修支援局】

##### ●研修医支援 (卒後臨床研修センター)

在学生対象研修プログラム説明会、指導医養成講習会の支援。研修オリエンテーション、歓迎会、研修医室のコーヒーマーカーやウォーターサーバーへの補充等、本院研修医への支援。資料として卒業アルバム購入。

##### ●専門医研修支援 (医師キャリア支援センター)

JMECC講習会の費用支援。

##### ●学生援助

競争的資金事業 R3年度2件採択

(香川大学学生ACLS勉強会、臨床推論勉強会)

#### 【広報局】

●会報発刊 2年間で計4号(60号~63号)を発刊

●讚樹會公式ホームページ運営管理

●讚樹會公式Facebookページ運営管理

#### 【事業局】

●医師賠償責任保険取り扱い業務:令和4年4月現在、加入者総数約1000名強。事務手数料の収入がある。

##### ●後援協賛事業

医学部祭、謝恩会は新型コロナ感染拡大防止のため開催中止となり、寄附は行われなかった。卒業生に記念品(ネームペン)贈呈。「Outstanding Teacher of the Year」表彰のサポート。

##### ●総会・支部・同期会助成

R2年度:関東支部会第19回(WEB開催)

R3年度:関東支部会第20回(WEB開催)

開催案内の事務的協力。

##### ●地域連携協力事業

R2年度:医学部附属病院主催の関係医療機関懇談会に、県内卒業生(S61年~H20年卒)の宛先ラベル提供、発送作業サポート。

R3年度:同様。

### ●新型コロナウイルス対策支援事業

R2年度：PCR検査システムを香川大学において確立するために必要なPCR測定キット購入費の一部補助。

R3年度：医学部祭の感染対策費を寄附することが理事会で決定したが、開催が中止となったため、実現しなかった。

### 【看護科同窓会「木蓮会」支援事業】

委託契約を結び、通常同窓会業務の事務的補助を行っており、木蓮会事務室として事務局内の一部スペースを提供している。

契約は毎年、自動更新している、

委託手数料をいただいている。

### ◆その他の会務報告

#### ①校友会

香川大学校友会理事会に讃樹會会長が理事として参加している。(7月、10月 いずれもWEB開催)

#### ②理事会・執行部会

理事会：

R2年度第1回(第16回総会に代えて)対面開催 8/4

R3年度第1回書類審議 8月

執行部会：

R2年度第1回対面開催 8/4

R2年度第2回WEB開催 12/11

R3年度第1回メーリングリスト開催 7/20～7/28

R3年度第2回WEB開催 11/29

#### ③事務局

会員のデータ管理、公式HP管理、公式Facebook管理、会費の徴収、医師賠償責任保険代行業務、会計管理、その他同窓会事業運営に関する業務全般

### 6. 令和3年度決算報告および監査報告

令和3年度単年度の決算報告が出口一志事業局長(昭和61年卒)から行われ、引き続き西田智子監査委員長(昭和63年卒)の代理として安田事務局長から監査報告が行われ、承認された。

### 7. 令和4年度予算案承認の件

出口一志事業局長より令和4年度予算案の説明があり、承認された。

### 8. 名誉会員推薦の件

徳田雅明先生、横見瀬裕保先生、鈴木康之先生、峠哲男先生、山本哲司先生が名誉会員に推薦され、承認された。

讃樹會題字を揮毫いただいたご縁で名誉会員にご就任いただいていた小森秀雲先生のご逝去について報じられた。

### 9. 功労賞表彰規程制定の件

同窓会の功績に著しく寄与する功労を挙げた者に対して表彰する功労賞表彰規程案が執行部より提案され、承認された。

### 10. 讃樹會シンボルフラッグ作成の件

安田事務局長からこれまでの審議経緯が説明され、これまでの審議で未決定であったデザインについて、アンケート投票で最多票のデザインを採用することで承認を得た。

### 11. 閉会宣言

用意された議事の審議が全て終了し、追加の議案がないことを確認し、議長より閉会が宣言された。

### ◆教授就任祝賀の報告◆

- ・R2年12月1日付で乾政志先生(平成4年卒7期生) 東京女子医科大学八千代医療センター
- ・R3年4月1日付で中村丈洋先生(平成7年卒10期生) 川崎医科大学 生理学2
- ・R3年4月1日付で三宅啓介先生(平成5年卒8期生) 香川大学医学部医学科 脳神経外科学
- ・R3年4月1日付で横平政直先生(平成11年卒14期生) 香川大学医学部医学科 医学教育学
- ・R3年4月1日付で門田球一先生(平成15年卒18期生) 島根大学医学部医学科 病理学講座器官病理学
- ・R3年4月1日付で平井宗一先生(平成14年卒17期生) 日本大学医学部医学科 機能形態学系 生体構造医学分野
- ・R3年4月1日付で松下暢子先生(平成5年卒8期生) 麻布大学生命・環境科学部 臨床検査技術学科 衛生学研究室
- ・R3年9月1日付で岡野圭一先生(平成4年卒7期生) 香川大学医学部医学科 消化器外科学
- ・R3年10月1日付で岡田 仁先生(平成5年卒8期生) 香川県立保健医療大学 臨床検査学科
- ・R4年4月1日付で筒井邦彦先生(平成元年卒4期生) 香川県立保健医療大学 看護学科
- ・R4年5月1日付で岩部真人先生(平成15年卒18期生) 日本医科大学 内分泌代謝・腎臓内科学

令和4年5月14日現在、65名が教授にご就任されています。

# 令和3年度会計報告

## 令和3年度収支計算報告書

令和3年4月1日から令和4年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)
<b>1. 事業活動収入</b>			
①会費・入会金収入	8,500,000	8,206,000	-294,000
②寄付金・広告収入	800,000	770,000	-30,000
③委託手数料収入	2,900,000	2,958,008	58,008
④利息	0	119,660	119,660
<b>事業活動収入計</b>	<b>12,200,000</b>	<b>12,053,668</b>	<b>-146,332</b>
<b>2. 事業活動支出</b>			<b>A) - B)</b>
①事業費支出			
会報制作費	1,100,000	1,005,180	94,820
後援協賛事業費	500,000	298,055	201,945
支部・同期会費	200,000	65,450	134,550
学術助成金事業費	1,650,000	1,620,936	29,064
国外留学助成金事業費		0	
学生援助費	1,400,000	40,000	1,360,000
国際交流協力費		0	
研修医協力費	700,000	260,757	439,243
講演会費	450,000	330	449,670
学会助成金事業費	280,000	200,000	80,000
新型コロナウイルス対策支援事業費	500,000	0	500,000
<b>事業費支出小計</b>	<b>6,780,000</b>	<b>3,490,708</b>	<b>3,289,292</b>
②管理費支出			
事務人件費	2,220,000	2,080,100	139,900
事務局・各委員会運営費	1,400,000	1,213,960	186,040
事務局設備投資費	0	0	0
ホームページ管理費	55,000	55,000	0
通信費	1,050,000	993,170	56,830
慶弔費	300,000	294,300	5,700
雑費	100,000	85,919	14,081
予備費	100,000	0	100,000
<b>管理費支出小計</b>	<b>5,225,000</b>	<b>4,722,449</b>	<b>502,551</b>
<b>事業活動支出計</b>	<b>12,005,000</b>	<b>8,213,157</b>	<b>3,791,843</b>
<b>当期事業活動収支差額</b>	<b>195,000</b>	<b>3,840,511</b>	
<b>前期繰越収支差額</b>	<b>45,396,780</b>	<b>45,396,780</b>	
<b>次期繰越収支差額</b>	<b>45,591,780</b>	<b>49,237,291</b>	

## 貸借対照表

令和4年3月31日現在

単位：円

資産の部	金額	負債及び 正味財産の部	金額
資産		負債	
1. 流動資産	(49,237,291)	1. 固定負債	(16,000,000)
現金・預金	49,237,291	同窓会館建設引当金	16,000,000
2. 固定資産	(16,051,334)		
一括償却資産	51,334		
同窓会館建設引当預金	16,000,000	正味財産	49,288,625
<b>合計</b>	<b>65,288,625</b>	<b>合計</b>	<b>65,288,625</b>

## 財産目録

令和4年3月31日

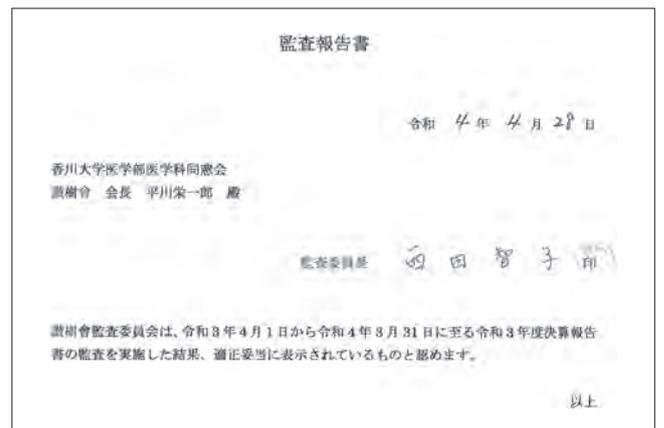
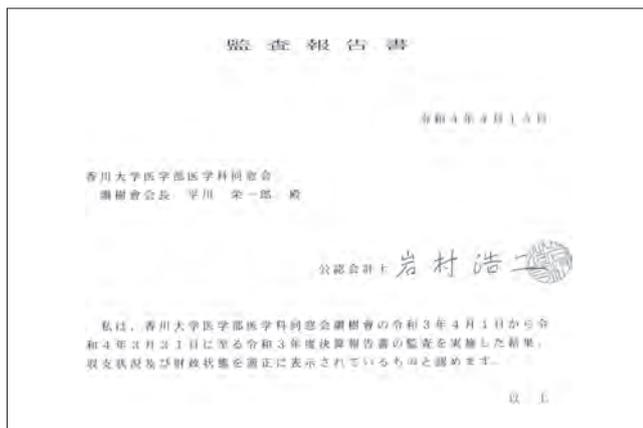
単位：円

資産の部		金額
1. 流動資産		
(1) 現金・預金		
イ) 手許現金		176,359
ロ) 普通預金	百十四銀行三木支店	2,114,964
ハ) 郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	35,667,689
ニ) 定期預金	香川銀行本店営業部	10,196,288
	百十四銀行医大前出張所	<u>1,081,991</u>
	流動資産合計	<u>49,237,291</u>
2. 固定資産		
(1) 有形固定資産一括償却資産		51,334
(2) 特定目的資産 同窓会館建設引当預金		<u>16,000,000</u>
	固定資産合計	<u>16,051,334</u>
	資産合計	<u>65,288,625</u>

## 固定資産の内訳

(令和4年3月31日現在)

資産の名称	数量	取得年月	取得価額	償却方法	耐用年数	償却率	当期償却額	未償却残高
事務局パソコン	2	R1.10	313,720	一括償却	3	0.333	104,574	0
事務局複合機	1	R2.6	154,000	一括償却	3	0.333	51,333	51,334
			467,720				155,907	51,334



## 令和4年度予算

## 令和4年度予算

令和4年4月1日から令和5年3月31日まで

事業活動収支の部

単位：円

科 目	4年度予算	3年度予算	3年度決算
<b>1. 事業活動収入</b>			
①会費・入会金収入	8,500,000	8,500,000	8,206,000
②寄付金・広告収入	750,000	800,000	770,000
③委託手数料収入	3,000,000	2,900,000	2,958,008
④雑収入	0	0	119,660
<b>事業活動収入計</b>	<b>12,250,000</b>	<b>12,200,000</b>	<b>12,053,668</b>
<b>2. 事業活動支出</b>			
<b>①事業費支出</b>			
会報制作費	1,100,000	1,100,000	1,005,180
後援協賛事業費	450,000	500,000	298,055
支部・同期会費	200,000	200,000	65,450
学術助成金事業費	1,650,000	1,650,000	1,620,936
国外留学助成金事業費			0
学生援助費	1,400,000	1,400,000	40,000
国際交流協力費			0
地域連携推進事業費	50,000	0	0
研修医協力費	700,000	700,000	260,757
総会費	120,000	0	0
講演会費	500,000	450,000	330
学会助成金事業費	300,000	280,000	200,000
新型コロナウイルス対策支援事業費	500,000	500,000	0
<b>事業費支出小計</b>	<b>6,970,000</b>	<b>6,780,000</b>	<b>3,490,708</b>
<b>②管理費支出</b>			
事務人件費	2,220,000	2,220,000	2,080,100
事務局・各委員会運営費	1,400,000	1,400,000	1,213,960
ホームページ管理費	55,000	55,000	55,000
通信費	1,050,000	1,050,000	993,170
慶弔費	300,000	300,000	294,300
雑費	100,000	100,000	85,919
予備費	100,000	100,000	0
<b>管理費支出小計</b>	<b>5,225,000</b>	<b>5,225,000</b>	<b>4,722,449</b>
<b>事業活動支出計 (①+②)</b>	<b>12,195,000</b>	<b>12,005,000</b>	<b>8,213,157</b>
当期事業活動収支差額	55,000	195,000	3,840,511
前期繰越収支差額	49,237,291	45,396,780	45,396,780
次期繰越収支差額	49,292,291	45,591,780	49,237,291

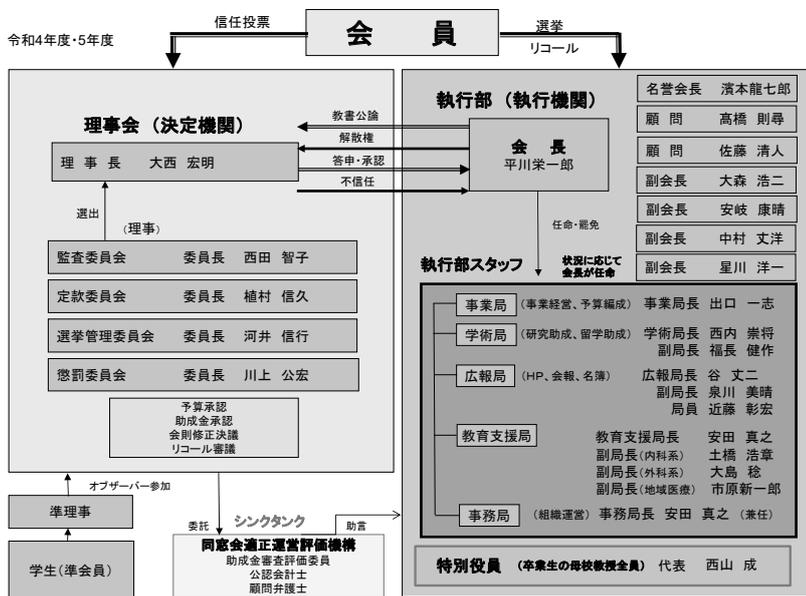
# 令和4年度・5年度理事一覧／組織図

## 理事一覧

	卒年	氏名	所 属
1	S61年	植村 信久	キナシ大林病院 内科
2		大西 宏明	高松赤十字病院 血液内科
3	S62年	河井 信行	かがわ総合リハビリテーション病院
4		川上 公宏	香川県立中央病院 血液内科
5	S63年	西田 智子	香川大学 教育学部特別支援教育講座
6		横井 徹	横井内科医院
7	H元年	上枝 宏和	うえだ眼科
8		合田真由美	滝宮総合病院 放射線診断科
9	H2年	羽場 礼次	香川大学 病理診断科・病理部
10		吉田 智子	さくらづか吉田クリニック
11	H3年	中條 浩介	香川大学 麻酔学
12		坂東 修二	香川大学 医学教育学
13	H4年	田井 祐爾	田井メディカルクリニック
14		政田 哲也	こくぶ脳外科・内科クリニック
15	H5年	川西 正彦	香川大学 脳神経外科学
16		山本 由佳	香川大学 放射線医学
17	H6年	加地 良雄	香川大学 整形外科
18		河北 賢哉	香川大学 救命救急センター
19	H7年	井町 仁美	香川大学 内分泌・先端医療・臨床検査医学
20		高尾 努	たかお整形外科医院
21	H8年	野間 貴久	香川大学 循環器・腎臓・脳卒中内科学
22		村田 晶子	白神眼科医院
23	H9年	小原 英幹	香川大学 消化器内科
24		花岡有為子	香川大学 産科産科女性診療科
25	H10年	石川かおり	香川大学 総合内科
26		岡内 正信	香川大学 脳神経外科
27	H11年	小松原悟史	香川大学 整形外科
28	H12年	高野耕志郎	香川大学 救命救急センター
29		三崎 伯幸	香川大学 呼吸器外科
30	H13年	田岡利宜也	香川大学 泌尿器科学
31		西庄 佐恵	香川大学 小児科学
32	H14年	澤登 慶治	市立伊丹病院 麻酔科
33		森 照茂	香川大学 耳鼻咽喉科学

	卒年	氏名	所 属
34	H15年	加藤 琢磨	香川大学 泌尿器科学
35		武田 敏宏	香川大学 麻酔・ペインクリニック科
36	H16年	小谷野耕佑	香川大学 総合周産期母子医療センター
37		宍戸 肇	香川大学 救命救急センター
38	H17年	今井 秀記	香川大学 精神神経医学
39		築瀬 賢	香川大学 麻酔学
40	H18年	須藤 広誠	香川大学 消化器外科学
41		村上あきつ	香川大学 がんセンター
42	H19年	藤原新太郎	香川大学 地域医療連携医学講座
43	H20年	中野 裕貴	香川大学 眼科
44		細川洋一郎	武岡皮膚科クリニック
45	H21年	石橋 洋一	香川大学 整形外科
46	H22年	樋笠 直哉	香川大学 精神科神経科
47		横田 直哉	香川大学 呼吸器外科
48	H23年	木田潤一郎	香川大学 輸血部
49		井端 智裕	JCHOりつりん病院 内科
50	H24年	久保 博之	香川大学 血液・免疫・呼吸器内科学
51		小林 俊博	香川大学 検査部
52	H25年	内田 俊平	香川大学 血液・免疫・呼吸器内科
53	H26年	多田 尚矢	香川大学 消化器内科
54		中林 良太	香川大学 救命救急センター
55	H27年	穴田 雅英	香川大学 放射線治療科
56		水尾 孝章	香川大学 消化器内科
57	H28年	佐伯 岳信	香川大学 検査部
58		西出 崇将	香川大学 放射線治療科
59	H29年	志賀 崇史	KKR高松病院 腎臓内科
60		多々納幹貴	香川大学 脳神経外科
61	H30年	東谷 雅人	高松赤十字病院 腎臓内科
62	H31年	今上 雅史	香川大学 放射線診断科
63	R2年	合田 亮人	香川大学 産科産科女性診療科
64		宮本貴和子	香川大学 小児科
65	R3年	岡野 滉司	香川大学 卒後臨床研修センター
66		板東 里佳	香川大学 卒後臨床研修センター
67	大学院H8	小川 尊明	おがわ口腔外科クリニック

## 組織図



## 特別役員 (※母校出身教授)

代表	氏名	所属	卒年
西山 成	薬理学	H5年	
正木 勉	消化器・神経内科学	H2年	
西山 佳宏	放射線医学	H2年	
木下 博之	法医学	H4年	
横井 英人	医療情報学	H8年	
村尾 孝児	内分泌・先端医療・臨床検査医学	H2年	
日下 隆	小児科学	H3年	
三木 崇範	神経機能形態学	H3年	
舛形 尚	総合診療医学	S61年	
星川 広史	耳鼻咽喉科学	H2年	
三宅 実	歯科口腔外科学	H3年院修了	
杉元 幹史	泌尿器科学	S63年	
金西 賢治	産科産科学婦人科学	H5年	
松田 陽子	腫瘍病理学	H10年	
小坂 信二	薬理学	H25年院修了	
三宅 啓介	脳神経外科学	H5年	
横平 政直	医学教育学	H11年	
岡野 圭一	消化器外科学	H4年	

## 功労賞表彰規程制定

第17回讃樹會定期総会において、功労賞表彰規程が制定されましたのでお知らせします。

### 香川大学医学部同窓会讃樹會功労賞表彰規程

(趣旨)

第1条

香川大学医学部同窓会讃樹會会員として長年にわたり同窓会活動に従事し、同窓会の功績に著しく寄与する功労を挙げた者に対し、讃樹會会長は理事会での審査の上、表彰状と副賞を授与する。

(功労内容)

第2条

同窓会の功績向上に寄与する功労とは、次のとおりとする。

- (1) 同窓会会員として同窓会の名を高め、同窓会活動に寄与した者
- (2) 新聞、雑誌、マスコミ等で取り上げられ、同窓会活動に寄与した者
- (3) その他前項に準ずると認められる功労を挙げた者

(表彰対象者)

第3条

表彰対象者は、同窓会正会員及び特別会員とする。

(表彰申請)

第4条

同窓会員は表彰に値すると認めた者について、自薦・他薦を問わず対象者、功労内容、理由等を記入した申請書(書式自由)を讃樹會事務局宛に提出するものとする。

(表彰決定)

第5条

讃樹會会長は理事会での審査の上、前条の申請書に基づき功労者の決定及び副賞等を決定する。

(表彰時期)

第6条

同窓会総会にて表彰する。

附則

この規程は、令和4年4月1日から施行する。

# ニュースの窓

## 第37期生卒業／学位授与式／謝恩会

令和4年3月24日

新型コロナウイルス感染症の波が寄せては引くを繰り返し終息が見えない中、香川大学卒業式・修了式は、式典を本学キャンパスで実施し、学位記授与は学部キャンパスごとに挙行されることになりました。昨年同様に参加者を卒業生・修了生のみとし、教職員、保護者の隣席は控えての実施となりました。

3月24日（木）に10時より本学キャンパスにて合同卒業式式典終了後、医学部に移動し、臨床講義棟2階において医学部医学科学位授与式が行われました。医学部長、医学科長、病院長からの祝辞、砂田賞、医学部長賞の授与、卒業生代表からの卒業記念品贈呈に続き、卒業生一人一人に学位記が授与されました。

この日、同窓会からは卒業記念品として、ネームペンを全員に贈りました。

学位授与式終了後、引き続き臨床講義棟2階において、飲食を伴わない形で謝恩会が行われました。ご出席いただいた医学部長と副学部長、病院長と副病院長に卒業にあたってのエールを頂戴し、卒業生からは花束と共に感謝の言葉を伝えました。最後に、6年間、共に医学を学んだ講堂での集合写真撮影を行いました。

謝恩会のイベントのひとつであるベストティーチャー賞（正式名称は Outstanding Teacher of the Year）は、毎年、6年生の投票によって決定されるものです。37期生は医学教育学准教授坂東修二先生をベストティーチャーに決定し、謝恩会実行委員長の後原健太さんが、日を別にして表彰状とトロフィーを医局にお届けしました。坂東修二先生は、これまでも2012年27期生、2016年31期生、2019年34期生、2021年36期生、そして今回2022年37期生と合わせて5回も受賞しておられます。坂東先生には、卒業生に向けてのメッセージを頂戴しました。（次ページ）



学位記授与



卒業記念品贈呈



## Message

Outstanding Teacher of the Year 受賞に寄せて (2022/07/15)

第37期卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

この度はベストティーチャーに選んでいただきまして誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。私は2012年にこの賞を頂いて以来、今回で5回目の受賞となりました。香川大学医学部において皆様の教育を任せられた身としては、少しでも卒業生の皆様に喜んでいただける講義や実習ができたことは私にとって喜びであり、大変光栄なことと感じております。今回の受賞を機にさらに医学教育に精進したいと決意を新たにしております。

さて、卒業生の皆様は多くの方が研修医として活躍していることと思いますが、私からのお願いとしては、これからは皆様も「医学教育者」として後輩のために尽力して頂きたいということです。医療は他の専門職と同様に「先輩の教えを確実に後輩に伝える」ということが職業としての発展に大変重要です。時として医学知識や医療技術は書物だけでは伝わりにくく、指導者からの口伝えや実技指導なしには理解が進まないこともあります。是非、研修医時代から先輩に教えてもらった知識や技術がどのようにしたら後輩たちに正確に、分かりやすく伝わるのかということを常に考えながら日々の診療に臨んでいただければと思います。人に教えるという作業は不思議と自分の中でも理解を深める効果があるものです。教えることは時間と労力がかかりますが、必ず自分にとっての成長にもつながりますので、後輩や日本の医療の発展のためにも各人が「ベストティーチャー」となって頂けることを期待しております。

最後になりましたが、どうか今後とも香川大学医学部の卒業生であるという誇りを胸に、体に気をつけて頑張ってください。

香川大学医学部 医学教育学講座  
坂東修二 (平成3年卒・6期生)



謝恩会での集合写真

## 理事会議事録

令和4年度第1回理事会 令和4年8月1日(月) 20:00~21:10 WEB開催

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、対面を避けWEB会議にて開催する。

当日参加21名及び委任状26名による計47名の参加となり、全理事67名の過半数(34名)以上により理事会が成立した。

### 1. 新執行部役員等について(報告)

平川栄一郎会長(昭和61年卒・1期生)から、新年度の執行部役員について報告があった。

### 2. 理事長並びに常任委員会委員長の選出について

事前に新年度理事に行ったアンケートで推薦が一番多かった大西宏明先生が今年度も引き続き理事長に就任することが決定した。

次に、希望アンケートに基づいて、4つの常任委員会への理事配置案が事務局から提示され、承認された。各委員会の最年長の卒年の先生が委員長に就任いただくという通例に従って、監査委員会(西田智子先生)、選挙管理委員会(河井信行先生)、懲罰委員会(川上公宏先生)、定款委員会(植村信久先生)をお願いすることとなった。

### 3. 令和4年度研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

急遽欠席となった西内崇将学術局長に変わって、平川会長より選考過程についての説明があった。研究助成金2件、研究奨励金6件の申請があり、学外評価委員15名の採点を集計した審査結果が資料とされた。その結果、評価委員による最高点を獲得した研究助成金部門の坂本篤志先生(H16年卒)と研究奨励金部門の大浦杏子先生(H22年卒)が、執行部案のとおり決定した。

### 4. 学会助成金審査

2023年開催予定の1件への助成が執行部案のとおり決定した。助成額は要項に則る。

Digital Hypertension Conference

(2023年5月/高松)助成額10万円。

### 5. 学生の競争的資金審査

以下の2件へ各2万円の助成が執行部案のとおり決定した。

①学生ACLS勉強会

②香川国際協力NGO U-dawn

### 6. 医学部祭支援について

学生係を通じて医学部祭実行委員会より、コロナ禍で開催を目指す医学部祭について支援の要望があったことが安田教育支援局長から説明があった。昨年と同様に、医学部祭寄附5万円に加えて、新型コロナウイルス支援事業費より医学部祭のコロナ対策への支援として30万円を追加し、計35万円を支援することが執行部より提案されたが、現段階では予算案が未定のため、明確な予算案が出るのを待って、医学部祭の支援額については執行部に一任することが決定した。

### 7. その他

①事務局体制検討部会の立ち上げについて

②国外留学助成金公募の再開時期について

コロナ感染症のため留学中止が続く情勢に合わせて、助成金申請公募も中止していたが、次第に留学再開の可能性も出てきているため、助成についても令和4年度第2回募集(9月末締切)から再開することとなった。HPで周知する。

③丸亀町総合クリニック整備計画への協力について  
平川会長より、丸亀町の再開発計画と診療所モールの計画について讚樹會に協力要請の働きかけがあった旨の説明があった。医師募集の広告掲載での協力という方法もあるが、積極的な協力は控え、しばらく静観すべきであるという意見が多く、現状の説明にとどまった。

## 令和4年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

## 速報

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	坂本 篤志 (平成16年卒) 浜松医科大学 内科学第三講座	出血刺激に対するマクロファージの炎症反応応答と冠動脈硬化進行の病態解明のためのトランスレーショナルリサーチ
研究奨励金	大浦 杏子 (平成22年卒) 香川大学医学部附属病院 消化器内科	切除不能肝細胞癌に対する全身薬物療法の治療効果を予測するための血管新生分子と関連するmicroRNAの同定

## ◆選考過程のご報告◆

第18回(令和4年度)讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門は2件、研究奨励金部門6件の全8件の申請があり、学外評価委員15名によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、具体的には学外評価委員一人につき、2～3件の採点をお願いしました。

採点は6つの項目(1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度)に対して、それぞれ5段階評価(5点:極めて高い、4点:高い、3点:やや高い、2点:やや低い、1点:低い)を行って頂き、合計点を平均しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では坂本篤志先生の「出血刺激に対するマクロファージの炎症反応応答と冠動脈硬化進行の病態解明のためのトランスレーショナルリサーチ」(4.13点/5点満点)が第一位となりました。研究奨励金部門では大浦杏子先生の「切除不能肝細胞癌に対する全身薬物療法の治療効果を予測するための血管新生分子と関連するmicroRNAの同定」(3.90点/5点満点)が第一位となりました。

また、今年度の全体平均点は3.59点/5点満点でした。

学外評価を基に8月開催の令和4年度第1回理事会において、坂本篤志先生に金壹百万円、大浦杏子先生に金五十万円を授与することを正式に決

定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

## 讃樹會研究助成 学外評価委員

## 臨床科

	氏名	
1	伊藤 進	香川大学 名誉教授
2	今井裕一	愛知医科大学 名誉教授/多治見市民病院 病院長
3	千田彰一	香川大学 名誉教授
4	成瀬光栄	国立病院機構京都医療センター 臨床研究センター 臨床研究企画運営部 特別研究員/医療法人仁会武田総合病院 内分泌センター長
5	原 量宏	香川大学名誉教授/医学部医療情報学 客員研究員
6	水野博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
7	吉栖正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学 名誉教授

## 基礎科

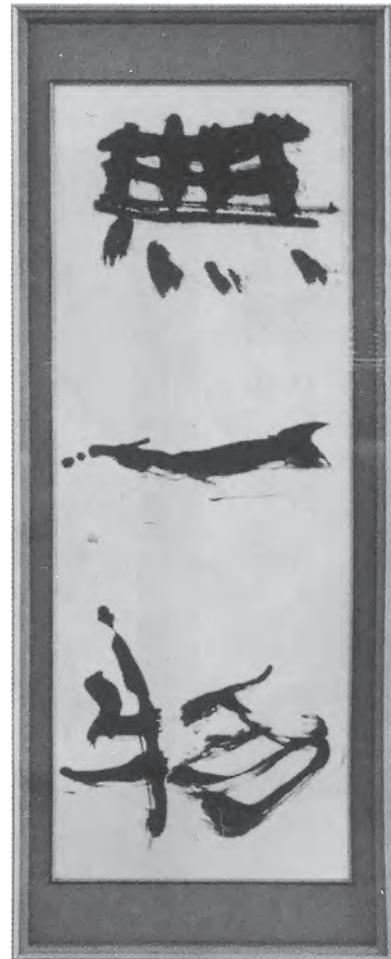
1	梶谷文彦	川崎医科大学名誉教授/岡山大学特命教授/北海道大学客員教授
2	小林良二	香川大学 名誉教授
3	阪本晴彦	香川大学 名誉教授
4	田畑泰彦	京都大学医生物学研究所 再生組織構築研究部門 教授
5	徳光 浩	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 バイオ・創薬部門 細胞機能設計学 教授
6	西堀正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻 生体薬物制御学講座 薬理学分野 特命・特任教授
7	藤田 守	久留米大学医学部客員教授/長崎大学医学部客員研究員/産業医科大学医学部非常勤講師
8	森田啓之	東海学院大学健康福祉学部管理栄養学科 教授

(敬称略)

讃樹會題字を揮毫いただいた小森秀雲先生を偲ぶ

香川大学医学部医学科同窓会の呼称である讃樹會は、今から二十年前、平成十四年第七回総会において決定しました。これに伴い、香川県在住の書家で県美術家協会長であられた小森秀雲先生に揮毫をお願いし、会のためにとご快諾いただきました。そのご縁で名誉会員にもご就任いただきました。その折、先生は、二つの異なる字体で書いてくださいました。讃樹會を体現する大変貴重な題字として、両方を表装し、大切に保管しています。

小森秀雲先生のご恩に厚く感謝申し上げます、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



「無一物」2000年（平成12）

# 小森秀雲さん死去

## 93歳 県内書道界をけん引



香川新聞 2022年（令和4年）3月15日（火曜日）

県内の書道界をけん引した。喪主は長男章弘（あきひろ）、長年にわたって県美術展覧会（県展）や四国書道展の審査員を務めた書家の小森秀雲（こもり・しゅううん、本名三朗（しろう）氏）が12日午後8時5分、上行結腸がんのため高松市の病院で死去した。93歳。自宅は同市花園町。葬儀・告別式は14日に近親者で行った。

原一耀氏に師事。高松での生徒指導の傍ら書道に励み、55年の日展に初出品で初入選、57年にも入選した。県展では55年から文部大臣賞を含め7回連続で入賞を果たした。力強く品のある作風を持ち味に数々の公募展で活躍し、ドイツや中国など世界各国の展覧会にも出品した。

56年に書道団体「墨華書道会（旧墨花書道会）」を、70年には「硯友会」を創立。89年から県美術家協会の会長・名誉会長として、書道だけでなく香川の美術文化の振興に尽力した。99年に四国新聞文化賞、2001年に県文化功労者、03年度には文部科学省の地域文化功労者に選ばれた。17年に旭日双光章を受章。

71年に本紙が始めた四国書道展の発足に関わり、第16回から理事就任、審査員を長年務め同展の礎を築いた。「うどん県書道パフォーマンス大会」など数多くの審査にも携わるなど後進の育成にも熱意を注いだ。

（四国新聞 2022年3月15日付）



## //// 第10回 ////

## ～香川大学医学部讃樹會同窓会名誉会長による関連病院訪問記～

香川大学医学部医学科卒業生は3605人となり、1000名以上が県内で医療に貢献しています。一期生卒業後36年が経過し、関連病院も数多くなりました。そのうち基幹病院にも医師が多く派遣され中心的な役割を担っています。

当企画は、基幹病院を中心に、その病院の特色、あるいは病院長の医療に対するお考えを、濱本が直接病院長を訪問しインタビューを行うものです。今回は、2022年6月29日におよそ1時間、高松平和病院にお伺いし、原田真吾院長にお会いして、卒業生の進路等に役立つお話を詳しくご紹介いただきました。

名誉会長 濱本龍七郎

## 高松平和病院の紹介



高松平和病院外観

高松平和病院 院長 原田 真吾 (平成16年卒・19期生)

### 高松平和病院の沿革・歴史

高松平和病院の前身は、1949年12月に高松診療所として高松市瓦町に誕生しました。当時、高松市街地は空襲で8割が消失し、バラック小屋が立ち並び、戦災者、復員者、失業者があふれ、栄養失調と肺結核、寄生虫病などが蔓延していました。そんな中、国立善通寺病院をレッドパージによって追放された宮脇済医師が医療にかかれぬ者のために看護師、事務の計3名で開業させました。

「道具は聴診器一本と風呂敷包みの薬が少々」という出発でしたが、巡回診療、集団検診で地域に出かける活動を中心に患者を増やし、1年2か月後に病院化を果たしました。1953年に全日本民主医療機関連合会

に加盟し、「働くひとびとの医療機関」として、無差別・平等の医療を目指して診療を行ってきました。さらに、1980年に香川医療生活協同組合となってからは、非営利・協同の組織として地域の組合員さんと一緒に健康づくり・明るく安心して暮らせるまちづくりのために様々な活動を行っています。現在では、医療生協として県下5万人の組合員に支えられる組織として発展しました。「いのちの章典」にもとづき、患者・家族を中心として、いつでも、どこでも、だれでもが安心してかかることができる医療・福祉の実現を目指した活動に取り組んでいます。

また、当院では無料低額診療事業を行っています。これは、社会福祉法や法人税法の取り決めにより、収

入に応じて医療費を減額もしくは無料とする制度ですが、低所得者や無保険者、最近ではコロナ禍による収入減で医療にかかることが困難な方の相談にのって医療を提供しています。

1970年に栗林町へ移転し、さらに、1984年10月に香川医科大学からの卒業生を受け入れ、基礎的な医師研修を提供できる病院にするために現病院を新築しました。内科、外科、整形外科、小児科が研修できる総合病院として、研修医を受け入れ、医師養成を行ってきました。

2010年には小児科の門前診療所「へいわこどもクリニック」を併設し、2011年に高松地域では初めてとなる緩和ケア病棟（21床）をオープンさせています。

### 病院機能

現在の病院機能としては、一般病床56床（内科・整形外科51床、小児科5床）、地域包括ケア病床（内科・整形外科46床）、緩和ケア病床（21床）です。自院の外来や年間約800件の救急搬入、診療所からの紹介入院に加えて、高次病院からのリハビリ目的での転院を受け入れるなど地域連携のハブ病院としての役割を果たしています。また、在宅支援病院として月～金曜日まで毎日訪問診療を行い（管理患者数160人）、地域にベッドを持つ病院として活動しています。

当院は組織上、医療生協法人を取っているため、法人税などの優遇以外は税金などの補助金は受けておらず、また「医療は平等」の理念のもと、入院における差額ベッド代を設定していません。

コロナ禍においては、感染指定病院ではないため入院治療はしていませんが、保健所との連携の中で2020年4月には発熱外来を設置し、保健所からのPCR検査に協力してきました。ウイルスの正体もわからず、PPEが十分ではない中で感染対策上、やや無理もしましたが、「誰のための何のための医療活動か」を合言葉に取り組み、近隣開業医や行政からの期待に応えようと努力しました。

### 医師養成・医学教育・働き方改革

院内の常勤医は、合計18名で内科8名、小児科2名、整形外科2名、緩和ケア内科2名、病理科1名、初期研修医3名です。勤務医全体における香川大学卒業生は6割で、臨研必修化以降では8割を占めています。

2004年の医師研修必修化では、第1期生となる2名



後列左から6人目：植本一駿（H26）、  
前列左から3人目：宮武孝子副院長（H7）



「無料低額診療事業の横断幕の前で」

の初期研修を受け入れて以降、初期研修は今年度まで17名の研修医が在籍し、質の高い研修を提供してきました。2020年度の研修項目改訂では外来研修の必修化、基本8科目の必修化、緩和ケアや地域包括ケアシステムの履修など当院の医療活動がそのまま研修内容に適用できています。

当院の研修では、基本理念・方針に基づき、プライマリヘルスケアの基本的診療能力と一定の専門性を併せ持った患者・地域住民の要求に幅広く応えていくことができる医師養成を目指しています。特に初期2年間の臨床研修の期間は、医師としての基本的な能力を習得する重要な期間として位置づけ、40年以上に渡り、スーパーローテート方式による総合的な診療能力の獲得のための研修を実践してきた実績・経験があります。小規模病院ではありますが、4つの特徴（地域医療、こどもの医療、緩和ケア、救急医療）を生かし、アットホームな環境で少人数ならではの柔軟な研修を強みとしています。研修医の希望や研修状況に合わせた研修スケジュール、外来から入院、また退院後の在宅療養でも主治医機能が果たせるプログラムで研修することができます。

専門医制度では、植本真由先生（平成27年卒）が総合診療専門研修プログラムの基幹施設として香川県第1号の専攻医過程を修了しています。

2018年からは医学教育が得意な当院医師による大学構内での臨床推論セミナー（現在はオンラインで開催）を続けています。2020年度からは6年生の選択病院実習であるクリニカル・クラークシップの実施病院となり、6年生の臨床実習を受け入れています。そこで縁のあった学生さんがマッチングに応募があり、2年連続複数の研修医を受け入れています。

また、働きやすい病院を目指し、勤務時間の適正化をすすめ、女性医師の産休・育休はもちろん、男性医師の育休取得も推進しています。現在までに3名の男性医師が育休を取得し、復帰しています。短時間常勤制度を利用して働く子育て中の医師が複数名在籍しています。

### 香川大学との連携

大学医局から派遣されている常勤医はいませんが、内視鏡検査や認知症外来、糖尿病外来などの専門医療で各医局から医師派遣を受けており、専門医療をご提供いただいていることに感謝しております。

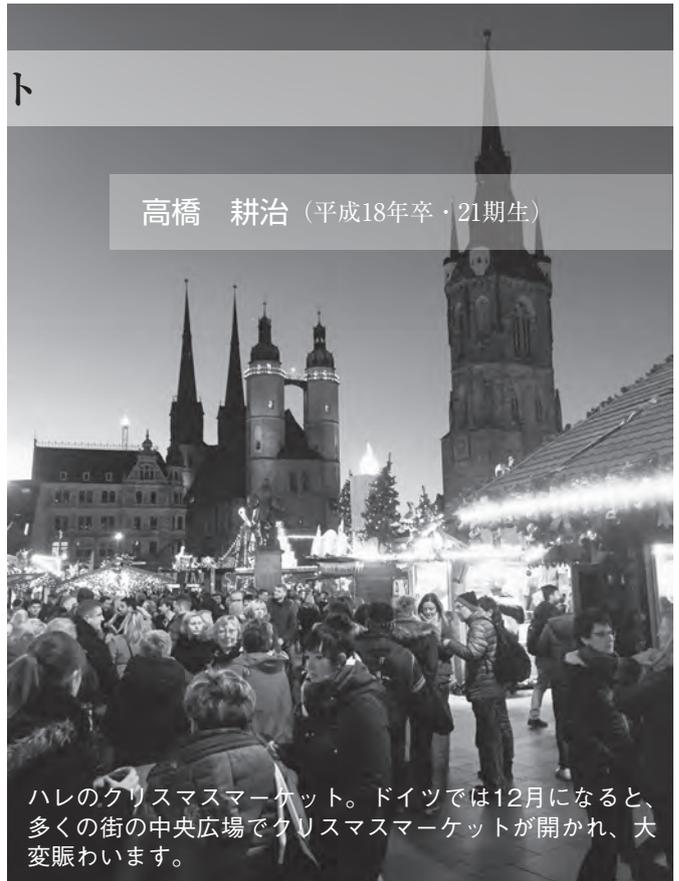


後列左から：伊藤翔吾 (R4)、安田 理 (H27)、何森亜由美 (H7)、大西綾花 (H20)、馬越隆光 (R3)  
前列左から：濱本龍七郎讃樹會名誉会長 (S61)、原田真吾院長 (H16)

## 国外留学助成金留学レポート



ハレの中央広場



高橋 耕治 (平成18年卒・21期生)

ハレのクリスマスマーケット。ドイツでは12月になると、多くの街の中央広場でクリスマスマーケットが開かれ、大変賑わいます。

同窓生の皆様こんにちは、私は平成18年卒業の高橋耕治と申します。この度、讃樹會留学助成金を頂き心より感謝いたします。留学体験記を書く機会を頂き、みなさまにご報告とこれから留学を考えている先生たちの後押しをできればと思います。

### 1. はじめに



大学の看板です。

私は平成18年に香川大学を卒業後に地元の京都に帰り京都桂病院で初期研修を始め、その後呼吸器外科医となって京都大学呼吸器外科教室に入局して研鑽を積んでいました。当教室は“academic surgeonたれ”との方針であり一度はどっぷり基礎研究につか

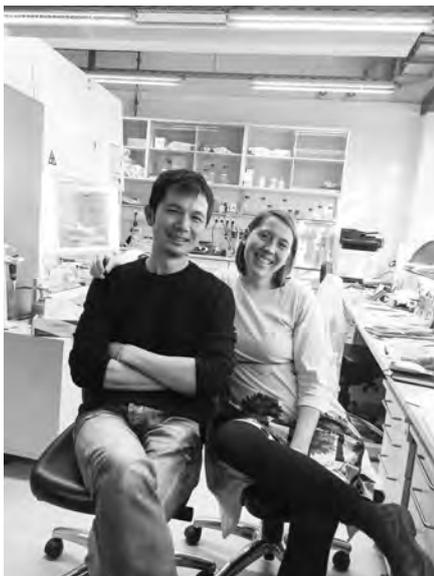
ることを推奨されており、私も卒後10年目の時に京大の大学院に入学しました。京大には「肺移植」「肺癌」「再生医学」の3つのグループがあり、私は肺癌グループに属して基礎研究を中心に行なっていました。肺癌の転移のメカニズムに興味があったため、EMT (Epithelial-Mesenchymal Transition: 上皮-間葉転換、簡単に言うと癌細胞の細胞同士の接着機能

が低下し、間葉系の性質を獲得して移動・浸潤能を得ることです) をメインに研究していましたが、最初はあまり乗り気ではなかった研究生活でしたが、仲間や指導者にも恵まれ徐々に研究の世界に魅了されていくようになります。卒業を控えた大学院4回生の時に、もう少し研究も続けたいなあ、留学するなら最後のチャンスかなあと考えるようになりました。元々京大では大学院の途中や卒業後に留学に行く人が多く、その流れもあったと思います。

### 2. 留学先の決定・セッティング

人間性に加え「ツテ・コネ」の世界だと思っています。当教室での留学先は主に北米であったのですが、私自身はヨーロッパで生活を送りたい思いが強く、さらに「サッカーが盛ん」「ビールが美味しい」なども併せ持つと最高だなあと考えていました。ちょうど私の研究グループの指導教官がオックスフォード大学での留学歴があり、その同僚がドイツの大学の教授になっていたという縁があって無事にドイツのHalle (ハレ) という街に留学できることが決まりました。

生活基盤を作るのはかなり難渋しましたが、留学先のラボのスタッフが手伝ってくれましたが、ビザの申請・住民登録・住居の手続き・子どもの小学校や幼稚園、学童の申し込み等々、留学前はそこまでドイツ語も自信が無かったため手続き系は英語でやりとりしたかったのですが、ハレは旧東ドイツで第一外国語はロシア語、というエリアであったため英語対応が可能な場面がかなり少ないのです。無事にすべてのセッティ



▶：ラボで仲の良かったアリ。ヨルダン出身。

◀：ラボで仲の良かったリザ。彼女はドイツ人。

ングが終わりビザも取得でき、子供達も学校・幼稚園に通い始めた際はかなりホッとできました。

### 3. 研究内容

大学の正式名称はMartin-Luther-Universität Halle-Wittenbergといい創立が1450年というので大変歴史のある、かつ宗教改革を行ったルターとゆかりのある大学です。医学部においてはメッケル憩室のDr. メッケルやバセドウ病のDr. バセドウも大学のOBです。

その中で私の所属は医学部の中でもProteinzentrumといってタンパク質の研究を専門にしている部署で、癌細胞の内外において重要なシグナルを伝えるタンパク質のカタチを捉えるのが主な研究テーマのひとつです。そして私の所属した「腫瘍生物学」ラボの代表はProf. Stephan Feller で癌の浸潤・分化の一端を担うGab1 (Grab2 associated binding protein 1) という巨大タンパクの専門家であり、Gab1の複数あるドメインを発現させ、立体化・結晶化を目標に研究を行っていました。Gab1は海綿生物など、8億年前の古代生物も持っている生物的には最も古いタンパクの一つであり、それだけに重要で発生学的にも必須で、Gab1をノックアウトした胚は発生すらできません。生体の発生に必要な分化、誘導を担うタンパクが癌の増殖・進展に関与するという事は、癌を敵として見なして戦う戦術が本当に正しい方向性なのか、考えさせられるなあと日々感じています。

### 4. 生活、家族のこと

私には小学2年生、幼稚園年長、そして2歳の未就園の子供がいました。留学を考えたときに一番気になったのは子供たちのことです。しかし他の留学経験者に聞くと、大抵の場合は「子供はあんまり心配せんでもええで」と言われること



が多かったです。普通に学校行っていたら普通に馴染むよ、ともよく言われました。

また、特に長男と次男は日本でもサッカーのクラブチームに入っており、ぜひサッカーが強いとされているドイツでの育成年代を経験させてやりたいという気持ちが大きかったです。いやむしろ、私自身がドイツのサッカーの育成を体感したかったと言ってもいいかもしれません。

学校や幼稚園が始まると、まあ色々ありました。正直に言うと、息子が仲間外れにされたりしているのを聞いて、帰国も頭にちらつくこともあった程です。しかし、現地で加入したサッカークラブではすぐに溶け込んで受け入れてもらうことができ、非常に気持ちよくトレーニングができていました。家とクラブという、学校以外に居場所があったのは大きかったかもしれません。徐々に学校でも仲間ができるようになり、夏休み頃にはすっかりドイツが気に入ったようで生活に馴染んでいました。

半年も過ぎれば、息子たちは自分たちで少しの買い物に行けたり、妻への通訳をしたり、ドイツが楽しい



長男と次男が所属していたTurbine Halle というサッカークラブの集合写真です。

し特に日本に帰りたいたと思わないと言うようになり、少しの寂しい気持ちと大きな頼もしい気持ちになったのを覚えています。

### 5. 旧東ドイツの地方都市で暮らすということ

私が滞在した2019年は、ちょうど東西ドイツが統一して30年で記念すべき年でした。そしてそれ以前は、ここハレは東ドイツに属しており、ソ連の影響が強い共産主義国家でした。30年といえは長いですが、やはりそこかしこに東ドイツの影響が多々残っています。例えばラボではスタッフが多国籍であったため英語が公用語でしたが、大学以外で英語が通じる人を探すのは困難を極めます。

私は多少ドイツ語のバックグラウンドがあったものもありますが、がんばってドイツ語でのコミュニケーションを心がけました。学校や幼稚園の懇談会や保護者会、各種パーティやサッカークラブでの他の保護者との交流、懸命に取り組んできました。滞在も数ヶ月を過ぎると、かなり現地に馴染んできたなと感じるようになりましたが、これはカタコトでもいいので現地の言葉を使うことと積極的に輪に入っていくことによって為し得たものと思います。留学において、これは最も大切なことだと思っています。インターネットの普及で、海外にいながらにして日本語での情報取得やコミュニケーションなど容易になった一方で、それが現地コミュニティを遠ざけてしまっている一因に

なっている気もします。

### 6. さいごに

現在は帰国して市中病院に勤務していますが、貯金は空っぽにはなったものの本当に留学して良かったと思っています。研究も留学も、医者として必要なわけではないのですが、私と家族にとっては自分の幅と彩りを大きく増やしてくれたと感じています。留学を考えている方がいらっしゃったら、是非思い切って飛び出してみてください。



ラボのメンバーでのホームパーティです。



## 教室便り

令和4年7月入稿

### 神経機能形態学

讃樹会の会員の皆様こんにちは。神経機能形態学の近況をお知らせ致します。今年度、講座で大きく変わったのは、教授三木が医学部長の任に就いたことです。医学部長と教授の兼任ですので、双方の業務をこなしています。更にもう3つニュースがあります。助教として大給日香里（おおたひかり）が赴任しました。技術職員として糸井大輝（くめいはるき）が、入職しました。そして、大学院生として三木裕香里（みきゆかり）が加わっています。スタッフの年齢が若くなりました。准教授鈴木、助教太田は精力的に研究を進めています。教員は、全員神経科学を専門分野としています。これに加えて、1年次生から6年生まで10名余りの学生が研究に来ています。賑やかで楽しい講座と自負しています。これからもよろしくお願いします。（三木 記）

### 組織細胞生物学

私、荒木が組織細胞生物学の教授となり16年目となりました。定年まで残り2年半です。教育分担やスタッフなどの状況は昨年と変ら変わっておりません。研究は、蛍光タンパク質融合機能分子を発現させた生きた細胞でのバイオイメージングや光照射によるタンパク質活性の制御（オプトジェネティクス）を用いて、エンドサイトーシスや細胞運動の分子メカニズム解析を続けています。現在も、研究室には学部学生が多く出入りしており、研究をしたり勉強をしたりして楽しんでいます。和やかな雰囲気の研究室ですので、同窓会員の皆さんも気楽に遊びに来てください。共同研究も大歓迎です。Instagramの公式アカウント（microscope\_lab.kagawa）開設しましたので覗いてみてください。香川大学医学部組織細胞生物学講座公式Facebookページもあります。（荒木 記）



### 分子神経生物学

2013年8月に山本が着任し、名称が脳神経生物学から分子神経生物学に変わって9年目を迎えています。現在スタッフ2名が、2名の大学院生とともに、医局の先生方との共同研究を進めながら、教育・研究に取り組んでいます。

当研究室では自閉スペクトラム症・統合失調症などの精神神経疾患や、アルツハイマー病などの神経変性疾患の分子病態の解明と、虚血性神経細胞死の分子機序の解析を主目的に、我々自身が世界に先駆けて見出し、その機能を明らかにしてきた因子群の解析を中心に、研究を進めております。昨年度は、高橋講師が新たに見出して解析を進めていた大脳虚血時における神経保護メカニズムについての研究結果の一部がまとめられ、筆頭・責任著者論文としてPNASに掲載されました。また、脳神経内科・國土先生が、当研究室が開発した手法を応用して解析を進めてこられた脊髄上行路形成機構についての研究結果の一部がまとめられ、学位を取得されています。

小さな研究室ですが、オリジナリティーに立脚したアイデアを掲げ所に、基礎・臨床の先生方との共同研究も発展させつつ、教育・研究を進めています。（山本 記）

### 自律機能生理学

自律機能生理学では、2022年4月から中国からの私費留学生1名がさらに加わり、教授1名、准教授1名、助教2名、研究員1名、大学院生2名、事務補佐員1名の8名体制で生理学の研究教育に取り組んでいます。

研究では、血液凝固系、老化、インスリン抵抗性、肺高血圧症、炎症性腸疾患、平滑筋ミオシンホスファターゼを主要テーマに、相互に関連しながら研究を進めています。新たな方向性として、老化細胞を標識したり、老化細胞を除去したりする仕掛けを組み込んだマウスを用いた老化研究、凝固因子受容体を細胞種特異的に欠損させるマウスを用いた細胞特異的病態解析研究、クライオ電顕による蛋白質複合体の構造解明を、学外研究機関との共同研究で進め、高度化した研究を展開中です。科学の歴史に残り、世界に発信でき、病める人に福音をもたらす独自の研究成果を常に目指しながら研究に励んでいます。

教育では、生理学Ⅱ（医学科2年次）と生理・薬理実習（医学科3年次）が主担当科目です。基礎教室所属の教員の本分を大いに発揮できるのが研究室配属です。卒後どの道を行っても医療プロフェッショナルの基盤となる科学的素養

の育成を主眼にしつつ、さらには医学研究への興味を抱かせ、一人でも多くの卒業生が医学研究の道を歩んでくれることを期待しつつ、指導に当たっています。実習最終日には、実習成果発表会を開催し、実験方法の原理や得られた結果の論理的解釈についてじっくりと諮問することで、厳密な科学的思考法の育成を実践しています。(平野 記)

## 薬理学

同窓の皆さまにおかれましては、平素より大変お世話になっております。薬理学教室の現状について報告申し上げます。薬理学教室のメンバーは大幅にリニューアルし、教員3名(うち外国人1名)、外国人研究員1名、大学院生6名(日本人3名、外国人3名:バングラデッシュ・中国・ブルンジ)、実験補佐員3名、秘書3名、医学部生5名の研究体制となり、昨年度はコロナのため来日が見合わされていた米国カリフォルニア大学からの短期留学生を受け入れる予定にしております。

研究活動につきましては、基盤Bを始めとする科研費7課題のプロジェクトに加え、JSPS、AMED、JAXAなどからの外部資金のサポートを受け、治療ワクチンの開発から宇宙実験に至るまで、世界最先端の研究を目指して進めています。臨床応用に向けたサルでの前臨床試験や患者サンプルを使用した臨床研究のみならず、遺伝子改変マウス・ラットや肺魚・イルカに至るまでの様々な生き物における各種生体反応のメカニズム解析、あるいはiPS細胞などの細胞レベルの検証を進め、さまざまなプロジェクトを展開しております。また、コロナで研究が進まない間に執筆した英文総説は、2021-2022年にNat Rev Nephrol, Hypertension, Hypertens Res (2報)、Pharmacol Rev, Am J Hypertens, J Hum Hypertens, Kidney Intなどに掲載され、合計インパクトファクターが100点に迫っております。一方、教育活動はハイブリッドの講義と対面の実習を一部は英語で実施し、社会貢献活動としてCOVID-19のPCR検査や科研費のリモート・レクチャーを実施してまいりました。

薬理学教室の具体的な活動内容につきましては、是非、ホームページをご覧ください( <http://www.kms.ac.jp/%7Eyakuri/> )。常に社会への貢献を念頭に置き、日々精進して研究・教育・社会貢献活動を進めて参りますので、引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。

(西山 記)

## 生化学

当研究室では、上田夏生教授、宇山徹准教授、佐々木すみれ助教の3名の教員によって生化学の教育と研究を実施しています。佐々木助教は令和4年3月に徳島大学で博士号を取得したばかりの若手で、4月1日付で着任しました。教員以外では、3名の大学院生(日本人1名、バングラデッシュ出身2名)と1名の事務員が在籍しています。歯科口腔外科から研究に来ていた中国出身の大学院生郭一満(Guo

Yiman)さんは、令和4年3月に博士(医学)の学位を取得し、中国に帰国しました。昨年度の大きな行事としては、上田教授が令和3年6月9-10日に開催された第63回日本脂質生化学会で実行委員長を務めました。新型コロナウイルス感染拡大の影響から本学会初のオンライン(リアルタイム)開催を余儀なくされましたが、90を超える演題発表と200名を超える参加があり、盛況のうちに無事終了することが出来ました。

学部教育では医学科2年次の「生化学」の講義・実習を始め、早期医学実習や課題実習、また臨床心理学科2年次の「生化学・分子生物学入門」等を担当しています。最近では、生化学や分子生物学に興味をもつ学生が頻繁に研究室に出入りしており、教員と一緒に基礎研究に取り組んでいます。今後、彼らの成果が学術論文に掲載され、自ら学会等で発表出来るようサポートしていきたいと考えています。また、所属大学院生に外国人が多いことから教室内での研究セミナーは基本的に英語で行っており、学部学生への講義や実習の一部でも英語で学べる機会を提供しています。

研究面では引き続き脂質代謝に関連したプロジェクトに取り組んでおり、特に「生理活性脂質N-アシルエタノールアミンの生理機能解析」や、「新規脂質代謝酵素群PLAAT分子の機能解析」を展開しています。最近、PLAAT分子の欠損が脂肪萎縮症や白内障を引き起こす新規要因であることが相次いで報告され、同分子群の新しい機能が解明されつつあります。我々はPLAATファミリーが脂質代謝酵素群であることを世界に先駆けて同定し、PLAATという名称を提唱した経緯から、現在、遺伝子欠損マウスを用いた生理機能解析を進めており、疾患モデル等を利用することでさらなる発展に繋がるよう努めています。成果の一部は令和4年6月25-26日に福岡大学薬学部にて対面式で開催された第74回日本ビタミン学会大会の若手シンポジウムで宇山准教授が発表しました。引き続き、教室員が一丸となって教育と研究に取り組み、独創性の高い研究成果を国内外へ広く発信していきたいと思っております。(宇山 記)

## 医用化学

医用化学教室では、昨年度に引き続き、和田教授、栗原助教に加えて、総合生命科学研究センターの中北慎一准教授の協力を得て、医用化学I(令和2年度後期から自然科学実習の化学実習を医用化学Iに統合)、医用化学II、および大学院科目の教育を進めるとともに、新たに開講された複数の医学部科目および全学共通教育科目の担当も担っています。また、早期医学実習や課題実習で複数の医学部学生を受け入れ、栗原助教が中心となって研究指導を行っています。一方、令和元年末に発生したコロナ禍はやや収束の兆しがあるものの、教室の教育・研究に大きな影響を与えています。1年次の全学共通教育や医学科講義は、なんとか全員を対象として対面講義で実施していますが、2年次以降の講義は半数弱の学生の出席に制限されており、他は講義収録の聴講に頼らざるを得ず、なんとか対面講義と

同等の効果が得られるよう、講義方法等を工夫しています。実習も人数が制限されますので、内容を改変して教育内容の維持のために苦心を続けています。

研究面では、和田は引き続き医薬品合成や水素製造用の新触媒開発や、分光イメージング技術開発に取り組んでいます。特に博士後期課程の大学院留学生（工学研究科所属）1名が無事に学位を得て巣立つ一方、令和4年度基盤研究（B）に採択され研究推進に弾みがついています。栗原助教は引き続きドラッグデリバリーや分子プローブ分野の研究を推進しています。

和田は引き続き、医学部国際交流委員会委員長、および学長特別補佐として、医学部および大学全体の国際交流業務を担当しています。まだコロナ禍の影響が残る中、幸いなことに、令和4年4月から5月まで3名の医学科6年生を、臨床実習のために英国・ニューカッスル大学に無事に派遣することが出来ました。今後も慎重にコロナ禍の状況をにらみつつ、順次海外派遣や受け入れを進めているところです。また併せて、遠隔での国際交流も盛んに実施されています。まだ大変な日々が続くでしょうが、頑張る所存です。是非讃樹會の先生方のさらなるご協力、ご支援をいただきたく、どうかよろしくお願い申し上げます。

（和田 記）

## 分子細胞機能学

分子細胞機能学では、中村隆範と小川崇、野中康宏の両助教の3名の教員、事務職員1名の4名によって本年も教育・研究にあたっています。教育面では1年生の早期医学自習I、早期体験学習、3年生の内分泌学（講義・実習）、統合講義、臨床心理学科2年生の生化学・分子生物学入門などを分担していますが、本年も昨年同様、講義は録画を中心に実施しています。内分泌学実習では対象の学生を半数ずつに分けたため、予定していたカリキュラムの一部の実施に留まっています。研究面では、昨年本稿で紹介させて頂いたとおり、野中先生が進めてきた構造生物学的研究が2報論文として掲載されました。また、小川先生の大腸癌に関する研究も着実に進展しています。

最後に私事になりますが、来年3月に定年退職を迎えることとなりました。これまでの同窓会、会員の先生方からのご厚情に感謝するとともに、医学部、貴会の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。多年に亘り本当に有難うございました。

（中村 記）

## 医用物理学

医用物理学教室では久富が学部教育や研究を進めています。久富は当教室で准教授として着任し13年目を迎えます。まだまだ発展途上で、工夫と努力を重ねているところです。特に一昨年に引き続きCOVID-19流行対策のため、対面+遠隔講義対応で苦慮しているところです。1年次の医学科学生に物理学の講義や実習を行っています。私自身は物理学

を学んだあと医学分野で研究を行ってきており、両方の立場で考えて講義することを心掛け、将来医学を目指す若者に少しでも役に立てばと考えています。

研究面ではPETやSPECTを中心とした医用画像解析を進めています。具体的には画像の定量化、撮像時間の短時間化、撮像法の非侵襲化などを行っています。附属病院の先生方や技師さんにご協力いただき研究を楽しんでいます。最近ではAIを適用し、画像のノイズ除去、定量画像計算の可能性、モダリティ間での画像変換などに挑戦しています。機会があれば他のモダリティでの解析にも着手したいと考えています。

（久富 記）

## 腫瘍病理学

腫瘍病理学教室は、昨年度から水津准教授と武藤助教が新メンバーとして加わり、新体制で教室運営を進めております。研究面では、老化や様々な癌（膵臓、胃、大腸、肝臓、肺、乳腺、腎臓、脳、骨軟部）とテロメア・テロメラーゼに関する研究や、オートファジーによる細胞死制御研究を進めています。また、松田教授が獲得された大型予算によりスライドスキャナーNanoZoomerやAI機能搭載解析ソフトHALO AIを導入し、人工知能による病理解析の効率化と、前がん病変の可視化を目指した研究を展開中です。4月からは、葉娟娟さん、向井裕理さん、樋口咲貴さんが大学院生として加わり、今後の研究活動の一層の飛躍が期待されます。診療面では、病理解剖のclinicopathological conference（CPC）やカンサーボードを通して、正確で専門性の高い病理診断や臨床医との協体制度を大切にしていきたいと思えます。教育面では、各学年の学生研究員を多数迎え、病理診断や研究の指導を行っています。医学科6年の久保君はCPCで症例発表を行いました。学生実習では、先のNanoZoomerで取り込んだバーチャルスライド画像をWeb共有し、対面型授業が困難な状況下においても病理学実習の質や効率性の向上を図りました。引き続き、大学院生、研究生を募集しています。ご興味のある方は是非当教室にご連絡ください。

（水津 記）

## 炎症病理学

炎症病理学教室は、千葉陽一准教授、村上龍太助教、宮井由美助教、と上野の4名での教室運営を行っています。本学部の名誉教授であり客員研究員でもある阪本晴彦先生と協力研究員の松本晃一先生には、研究・教育・診療でご協力を頂いており、大学院3年次生の若松君が精力的に実験に取り組んでいます。教育では、実習を重んじ、バーチャルスライドと顕微鏡を併用し、病理学をわかりやすく解説していきたく存じます。また、臨床講座から多数の若い先生を受け入れており、現在では、小児科・小児外科・麻酔科・産科学婦人科学の先生方が出入りし、認知症や様々な疾患の病態解明とその予防、治療法に関する研究を行っています。最近では、脈絡叢機能不全の認知症への関

与に注目し、讃岐の丘から世界に向け研究成果を発信し続けるよう、教職員一同一層努力していきますので、よろしくをお願いいたします。(上野 記)

## 免疫学

免疫学講座がスタートして11年度目となりました。教授1名、助教1名、技能補佐員1名、事務補佐員1名で、研究・教育を進めています。大学院生の高尾先生は、希少糖を用いる研究成果を論文に投稿しました。昨年と同じくCOVID-19の影響により、免疫学の講義はオンライン対応が続いています。令和4年度前期は、オンラインと対面のハイブリッド形式の講義でした。免疫学実習は、内容を見直して学生半数ずつ2回行いました。令和3年度の選択科目として、医学科3年生2名(課題実習)、2年生2名(早期医学実習Ⅱ)、1年生2名(早期医学実習Ⅰ)の、合計6名が本講座を選択し、研究に触れました。将来の研究に繋がれば良いと考えます。研究の特色としては、①樹状細胞の活性化メカニズムの解明、②希少糖による免疫機能の調節、③遺伝子改変マウス系統の作成支援が挙げられます。新しいユニークな研究成果を積み上げていく所存です。今後ともよろしくをお願いいたします。(星野 記)

## 国際医動物学

2009年に新井が准教授として着任してから13年が経ちました。助教の補充がないため教員1名体制が続いています。医動物学実習では新型コロナウイルス感染拡大を避けるため、標本の顕微鏡観察動画を視聴してスケッチする形式をとっております。扱う対象(寄生虫虫体など)の厚みがあるため、全体像をとらえるために絶えずピントを前後に動かすように収録している点で、バーチャルスライドとは異なるものです(自分で視野を動かすこともできません)。最も典型的な虫体を選んで収録しているため、間違っただものを描く心配はありませんが、自分で探す苦労を体験できないことがデメリットです。実際に自分の目で標本を観察したい学生については、実習室での実習を認めています。毎回10名程度の参加者があり、収録動画と比較しながら観察することで、より理解が深まるメリットがあるように思われます。1名体制では対面実習への回帰は難しいため、今後とも遠隔実習の拡充に尽力する所存です。(新井 記)

## 分子微生物学

分子微生物学教室は教員3名、事務補佐員1名、技能補佐員2名で微生物学の教育研究を行っています。大学院生は現在5名ですが、今年度から国費留学院生2名が新たに加わり、元気に研究に取り組んでいます。教育面では3年生の微生物学の講義および実習、4年生の統合講義「感染症ユニット」を担当しています。臨床心理学科2年生の「微

生物学・医動物学概説」の講義も担当しています。将来、感染症診療に当たる際に必要となる微生物の基礎知識や臨床的な重要項目を着実に習得できるよう教材の改良などに努めています。研究面では腸内フローラの破綻と健康維持に関する研究を行っています。次世代シーケンズによる腸内フローラの解析が容易になったことで、腸内フローラと疾病との関連についての研究が活発に行われています。当教室でも新しい解析技術を取り入れ、腸内フローラ研究をさらに推進し、社会に還元できるような研究成果を発信していきたいと考えています。(桑原 記)

## 衛生学

衛生学教室は准教授・宮武と助教・鈴木の2人で構成しています。今年度は5名の大学院生と共に一緒に楽しく活動しています。宮武先生の温かな指導の下、昨年度は14本の論文が国内外の学術誌に掲載されました。

教室の研究は、メタボ、2型糖尿病、慢性腎臓病の生活習慣改善支援に加え、行政と協同で子どもの生活習慣改善対策事業や子育て支援事業、小中学校にネット・睡眠関連の調査をした上で啓蒙活動も行っています。また、大学教育基盤センターと英語学習プログラムの作成に関する研究も行っています。また、サテライトセミナーも積極的に行っています。

三木町との補助事業である「健やかあすなろプロジェクト」の一環でオンライン技術を用いた子育てセミナーを毎月1回、地域の小中学校と連携しながらフリースペースを毎週2回開催し、保護者の相談にもなっています。今後も引き続き、教育、研究、社会貢献等を積極的に進めたいと思っています。(鈴木 記)

## 公衆衛生学

教室のスタッフ、大学院生等に変更はありません。昨年に引き続き、多彩なバックグラウンドを持つ者が研鑽を積んでいます。教育について、コロナ対応も3年目に入りましたが可能な限り対面授業を行っています。要所ではリアルタイムオンライン授業を取り入れており、リモートによる演習、グループワークの実施などの工夫を行っています。また、香川県と共同で行っている「公衆衛生トークセミナー」について、感染予防のため参加人数を制限しながらも開催を継続しています。引き続き、社会医学を目指す学生、若手医師の育成を続けていきたいと思えます。学術活動としては、香川県小児生活習慣病、香川県民健康栄養調査をはじめとする地元密着型の研究、メタボリックシンドローム対策のためのサプリメントの開発、高齢者の体力推移と維持、緩和ケアにおける鍼灸治療の効果に関する研究などに取り組んでいます。(平尾 記)

## 法医学

コロナ感染が持続する中、2021年度も学術活動への影響が続きました。9月に延期された第105次日本法医学会学術全国集会（福岡）は誌上開催になるなど、国際学会、国内学会とも多くが誌上開催やオンライン開催となりました。ハイブリッドで開催された10月の法医学会学術中四国地方集会（出雲）、12月に延期され、十分な感染対策を講じて対面で開催された日本法医病理学会（長崎）では、それぞれ木下が発表しました。

教育に関しては、8月末からの法医学の系統講義期間は、対面での講義が可能でした。ただ、実習は昨年同様、縮小して演習のみ実施しました。

人事面では、2021年5月に事務の松田瞳さんの任期満了に伴い、6月から長野朝美さんが復帰しました。技能補佐員として6月から田中悦子さんが、9月から川原佐知子さんが加わりました。また9月から7か月間、科目等履修生として原井川京介さん（高松海上保安部）を受け入れました。剖検実務・検査に関しては、少ない教室員全員で協力して行っています。今後とも、讃樹會の先生方には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。（木下 記）

## 医学教育学

医学教育学講座の近況をご報告申し上げます。

昨年の「教室だより」でもお伝えしましたように、医学教育学講座は岡田宏基前教授から横平政直教授にバトンタッチし、さらに質の高い医学教育を目指して日々精進しております。近年の教育における国際的な流れは、学生が自らの意思と行動によって学び取る「アクティブラーニング」が重要であるとされていますが、現在の医学教育における最大の問題は2年半におよぶ新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより学生同士が密に議論したり、患者のベッドサイドで実習するという「アクティブラーニング」の土台が大きく揺るがされている事です。アクティブラーニングはそもそも密になりやすく、感染症が拡大している状況では機能しにくい教育法であることを痛感しております。しかしながら、パンデミック下においても何か有効な教育法が無いかと模索する中、多くの講座や診療科の協力を得て、パイロット的に新たなカリキュラムも導入しております。例えば医学科1年生のチュートリアル教育にはリモートワークツールであるMicrosoft Teamsを導入し、オンラインで学生同士あるいは教員と議論できるような環境を作ったり、高学年においては臨床実習中に附属病院の玄関前に設置されている新型コロナウイルスの検査場において医師とともに防護着を着用して検体採取を見学したりと、「パンデミックだからこそできる教育」に着目し、その成果を医学教育学会誌等に発表しております。現時点では新型コロナウイルス感染症がどのように推移していくのか全くわかりませんが、後輩たちの学びの機会が失われることが無いよう努力していく所存です。

今後とも讃樹會の皆様の一層のご協力、ご支援を賜りま

すようお願い申し上げます。

（坂東 記）

## 血液・免疫・呼吸器内科学

讃樹會のみなさまにおかれましては、Covid-19対応を含めご苦勞も多いかと拝察申し上げます。血液・免疫・呼吸器内科学教室の近況をご報告申し上げます。

門脇則光教授が講座を主宰され8年目となりました。昨年10月より香川大学医学部附属病院院長に就任され病院のみならず香川大学の運営において中心的な役割を担っておられます。医局スタッフも病院長としての門脇教授を支えるべく人的資材の獲得などに取り組んでいます。入局者も徐々にではありますが増加しておりますので、今後讃樹會の先生がお務めのご施設への医師派遣も増えて参ると存じます。是非とも温かく受け入れて頂けますようお願い申し上げます。

診療について特筆すべきは、血液内科の先進医療として四国初の難治性白血病とリンパ腫を対象としたCAR-T細胞療法（キムリア<sup>®</sup>）を提供できる施設となったことです。CAR-T細胞療法とは、患者さんの血液から採取したTリンパ球に、血液がん細胞を攻撃できるように「キメラ抗原受容体（CAR）」と呼ばれる特殊なタンパク質を遺伝子導入したCAR-T細胞を作製し、患者さんに投与することで、患者さん自身の免疫の働きを利用し、難治性のがん細胞を攻撃する画期的な治療法です。この治療法により、従来の抗がん剤治療で治らなかった患者さんでも高い抗腫瘍効果が得られ、寛解を達成することが可能になりました。もちろん呼吸器内科、膠原病・リウマチ内科もそれぞれ特徴のある診療を行っています。県内外の讃樹會会員の皆様のご支援により、3診療科で4,412名（内紹介患者：763名）、入院患者691名を診療させて頂いております。今後も先生方のご期待に添えるよう、医局員全員で頑張ってお参ります。

以上近況報告をさせて頂きました。讃樹會の一層のご支援を賜りますよう教室員一同心よりお願い申し上げます。

（土橋 記）

## 循環器・腎臓・脳卒中内科

南野哲男教授が講座を主宰され、7年目に入りました。今年度は腎臓グループに佐伯浩一先生が加入されました。心臓グループ、腎臓グループ、抗加齢血管（脳卒中）グループが緊密な連携を取りながら全人的な医療を提供しています。また、循環器ホットラインや救命救急センターとの連携にて地域医療を支えるとともに、重症心不全患者や難治性ネフローゼ患者に対する高度先進医療を実施し、地域の皆様に高度で最新の医療を提供いたします。重症心不全患者に対する左室補助人工心臓（LVAD）の管理施設、経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVI）の実施施設に認定され、さらに特定機能病院としての役割を担っていく所存です。腎臓グループでは、全国学会である第7回腎移植内科研究会の主催も行います。

今後も、「地域と歩み、ひとを育む」をポリシーとし、香川県の地域医療を支える人材の育成や循環器系救急医療ならびに安心・安全の標準療法の実践を目標に教室員が一丸となって取り組む所存ですので、今後とも讃樹會会員の皆様におかれましては、一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(祖父江 記)

## 消化器・神経内科学

消化器・神経内科は、正木勉教授のもと、「臨床、基礎を問わず行った仕事は必ず論文に仕上げ世界に発信する」を目標に、日々切磋琢磨しながら、日常診療、研究、教育に取り組んでいます。

当科の特徴

- ① 消化器・神経内科は、内科領域の中でも大変多岐にわたり、大学病院というと専門性高く、限られた患者さんのみを診療しているイメージがあるかと思いますが、最先端な医療を行いつつも、common diseaseを取り扱うことも多く、バランスのとれた臨床研修を行える環境にあります。また、大学病院だけで40名程度の医局員が在籍し、各分野の専門医・指導医が教育を行っておりますので医師層は厚く、指導体制は万全です。
- ② 世界のトップレベルを目指した臨床／基礎的研究を活発に行っています。研究グループは臓器別に分かれ、さらに臨床と基礎の研究グループに分かれ、その垣根を超えた横断的研究も行っております。正木教授の考えでもありますが、世界のトップレベルを目指し、臨床に直結する研究を進めております。研究の成果については、国内外の学会等で発表し、学会や研究会等を通じて色んな人に出会えることは、医局にいることの特権ではないでしょうか。
- ③ 香川県内外に12の関連病院を有し、大学病院とは積極的に人的交流をはかっております。大学病院や関連病院で多様な指導医のもと屋根瓦方式で必ず3人以上で医局員を派遣し幅広い臨床研修を行うことが可能なため、プラスの要素は多いと思います。

讃樹會の皆様には今後も一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(谷 記)

## 皮膚科学

大日輝記教授が就任し、香川県内の皮膚科医療の再構築を目標とする新体制を発足して3年目に入りました。今年度は新たに2名が教室に加入し、現在は大日教授以下助教1名、医員3名で教室を運営しております。

先生方のご支援のお陰で、新体制発足以降徐々に患者数、手術件数ともに増加して参りました。外来診療においては、

脱毛専門外来を開設した他、レーザー外来や多汗症治療なども開始しております。

まだ始まって間もない医局ですので何かと至らない点はあるかと存じますが、コンサルト等には誠実に対応し先生方から信頼される皮膚科となることを目指しております。地域においては県内外の病院や開業医の先生方とのネットワークを形成し、香川県内の皮膚科医療の支えとなるよう医局員一同日々努力する所存です。先生方のお役に立てることがございましたら、どうぞ遠慮なくご紹介頂ければと存じます。今後とも讃樹會会員の皆様には一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(喜田 記)

## 精神神経医学

当講座教授に中村祐先生が就任して18年目を迎えました。中村教授就任以降、香川県内の精神科医療の連携を図るために香心会が創設され、また、香川県との連携が進められ、地域医療精神医学講座が開設されました。現在まで医局員が増えると同時に精神保健指定医も増えております。香川県内の関連病院にも人材を派遣し、香川県の地域医療を支える一助となっております。2018年度からは新専門医制度が始まり、精神科専攻医も迎えております。

現在、認知症・児童思春期(2014年4月1日より「子どもと家族・こころの診療部」を引き継いで運営)・摂食障害・睡眠障害・緩和ケアなど、全ての精神科領域をカバーして診療を行っています。身体疾患を合併する患者様については、身体科の先生方には大変お世話になっております。また逆の場合もあろうかと思っております。今後も、香川県の地域医療の支えとなるよう、医局員一同努力する所存です。讃樹會の先生方にはより一層のご支援を賜りますようお願い致します。(今井 記)

## 小児科学

当講座は日下隆教授のもと「成熟する小児科」をモットーに一人一人の教室員が人間的に成熟する教室を目指しています。

小児科医はこどもの総合診療医であり、こどもとその家族をトータルケアできることが重要で、新生児医療や救急医療、乳幼児健康診断などのプライマリケアを習得したうえで自分の専門分野をもち、臨床や研究活動を行うために教室員の学会活動や論文作成、海外・国内留学なども積極的にサポートしています。

卒後臨床研修に関しては「成熟する小児科」としてこどもと、家族と、仲間とともにその成長を喜ぶ小児科医師育成を行うことを目標に、小児科医としての喜びを体得できる研修を心掛けています。

研究では新生児脳酸素代謝グループ、黄疸・薬物代謝グループ、乳幼児運動発達グループが、熱意をもってそれぞれの研究テーマに取り組んでおり、学会発表や論文作成を行うとともに、今年も新たに4つの科学研究費補助金を獲得

するなど助成金の獲得にも力を入れています。

今後も地域医療と国際医療貢献の双方に視点を持つ、人間的に成熟した人材育成を心がけるとともに、香川県の小児医療を支えていくため、教室員が一丸となって精進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。(小西 記)

## 小児外科学

当科は、香川大学医学部総合周産期母子医療センターの一翼を担い、香川県小児医療への貢献と発展を掲げ、日々診療を行っております。

小児外科の扱う疾患は頭頸部、胸部(肺・縦郭)、腹部(消化器・肝胆膵・泌尿器)、体表と多岐にわたります。また、【小児は大人のミニチュアではない】と言うように、成人と異なる小児特有の疾患も多く、特別な技術と知識が必要とされるため日々の研鑽が重要となります。

生後まもない新生児から中学生、さらには成人期に移行した方もいます。小児でありながらも、予後の厳しい症例もありますが、子供たちの診療のみだけでなく、ご家族の気持ちにも寄り添った医療を提供することを心がけています。

少子化のなか、より一層小児医療の重要性が増していく事が考えられます。

関連施設である高松日赤病院小児外科はもちろんのこと、地域医療に携わる小児科、産婦人科の先生方と協力し、上質な医療を提供していきます。(田中 記)

## 消化器科学

当科は「患者さん中心の全人的医療の提供」を理念とし、手術を柱とした安全かつ高度な医療を提供しています。日本消化器外科学会の指定施設であることに加え、日本肝胆膵外科学会の高度技能専門医修練施設A(全国で約120施設、香川県で唯一)にも認定されており、高難度肝胆膵外科手術の安全性と長期成績は高く評価されています。これまでに大腸、胃、食道、膵臓領域でのロボット手術の導入を行い、順調に症例を積み重ねながら、さらなる治療成績向上に取り組んでいます。移植医療としては、四国唯一の膵臓移植実施施設(全国18施設)に認定されており、今年度には当科で10例目の1型糖尿病患者に対する膵臓移植が行われました。2021年9月より、岡野圭一教授の元、新体制となりましたが、常に当教室は若い力で活気に満ちており、学生や初期研修医に対して、消化器外科の魅力を伝え続けています。また若手からベテランスタッフまで多数の手術を受け持ちながら、さらなる治療成績向上へ向けて日々精進しております。

研究面では、現在4名の大学院生を中心に、膵癌や食道癌、大腸癌などの研究テーマを持ち、熱意をもって取り組んでおります。今後も患者さんのお力になれるようにス

タッフ全員が誠意を持って診療を行ってまいります。今後ともご指導を何卒宜しくお願ひ致します。(浅野 記)

## 呼吸器・乳腺内分泌外科学

当教室では令和4年4月に矢島俊樹先生が新教授に就任されました。矢島先生はこれまで群馬大学で呼吸器外科の臨床・研究・教育に取り組んで来られました。

呼吸器外科領域では令和4年に報告された臨床試験の結果、小型肺癌では呼吸機能温存を可能とする「肺区域切除」が標準術式となる可能性が高く、これまでの「肺葉切除」よりも多くの工夫や確かな技術が必要とされます。矢島先生はこれまで幾多の総意工夫をかさね、全国的にも類を見ない「全ての区域に対する胸腔鏡下肺区域切除」を確立されております。また縦隔腫瘍に対する胸腔鏡手術にも精通されており、今後我々医局員のレベルアップ、延いては患者さんによりストレスの少ない医療を提供できると確信しております。

その他には令和4年4月に松浦奈都美先生と徳永が帰還。令和4年3月に乳腺外科阿部宣子先生、4月に池内真由美先生をお招きし、呼吸器外科11名、乳腺外科3名、合計14名で4月からの新体制がスタートしています。

当教室には県内外に関連病院(高松市立みんなの病院、KKR高松病院、坂出市立病院、高知医療センター(高知県)、倉敷中央病院(岡山県)、神鋼記念病院(兵庫県)、明和病院(兵庫県)、天理よろづ相談所病院(奈良県))があり、医局員それぞれが各地域で活躍しております。

研究部門においては、肺癌の遺伝子解析を元にした治療法の開発、ICG蛍光カメラを用いた手術手技の開発、気管や肺の再生医療、肺癌の病理学的評価と予後について取り組んでおり、学会発表や論文執筆に勤しんでおります。また矢島先生が取り組んで来られた腫瘍免疫の基礎研究も今後開始する予定です。

当科では患者さん一人ひとりの心に寄り添いながら、その方に最も適した治療法を提供して参りたいと考えています。皆様今後ともご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。(徳永 記)

## 整形外科

整形外科では令和4年3月をもって山本哲司前教授が退任されました。今後は9月1日に新教授を迎え、新体制に移行する予定です。

今年度は谷勇樹先生が入局され、立派な整形外科医になるべく研修に励んでいます。新型コロナウイルス感染症に関する暗い話題が多い中、入局を決めてくれたことはうれしい限りです。たった一人の入局者ですので、仕事量が過多にならないよう気を付けながら手厚く指導し、大切に育てていこうと思っています。

整形外科の診療分野は多岐に渡っています。骨軟部腫瘍、脊椎外科、股関節外科、膝関節外科、足・足関節外科、肩

関節外科、手外科、関節リウマチ、外傷などを専門的に診る医師が在籍し、精力的に診療に当たっています。また、重度外傷の治療を行う機会も多く、その治療には若手の先生方が大いに活躍してくれています。

基礎研究に関しては骨軟部腫瘍、骨代謝、骨欠損再建などの研究を主に行っています。現在、大学院生が8名在籍しており、これら大学院生が中心となって研究活動を推進しています。最近ではほとんどの学会がweb開催になり、国際学会への参加も困難なため、成果を披露する機会が減っていますが、それでも個々の研究活動、論文執筆に勤しんでくれています。

コロナの影響でいろんなことが制約されてはいますが、若手の育成や臨床・研究活動など、今できることに精一杯の力を注いでおりますので、今後とも整形外科教室を宜しくお願い致します。(加地 記)

## 形成外科学

2017年4月に永竿智久教授が5代目の当教室教授に就任して6年目を迎えています。

臨床では教授のライフワークとなっている漏斗胸に対する胸郭形成術を年間で40-50例おこなっています。毎週のように胸郭形成術を行っておりますので、スタッフ、病棟ナースともに術前術後管理に慣れ、患者様がスムーズに退院に向けて入院生活が送れるようになってきています。コロナ禍にもかかわらず、県内外より多くの患者様が手術を希望して来院しています。コロナ終息後にはさらに症例数が増えるのではないかと考えています。

研究面では工学解析、シミュレーションを用いた多くの報告をしています。外傷時の顔面頭蓋に生じる骨折線の解析や、外耳形態やケロイド発生のメカニズムも解析して報告しています。

今年も新たに2名の仲間が増えました。岡山出身の岡本希先生は、皮膚皮下摘出術、軟部腫瘍摘出や瘢痕形成、先天異常の形成術に積極的に参加してくれています。また、子育てに奮闘しながらも福盛京子先生が当科に加わってくださり、手術・病棟業務を担ってくれています。2人ともに、今後も香川の形成外科診療に貢献してくれると思います。スタッフも責任を持って指導していきたいと考えています。

現在の診療は医員6名(岡本、赤池、細川、高橋、三柳、福盛)と助教2名(玉井、木暮)教授の合計9名で診療に当たっています。大学病院の責務を果たすべく、熟練した技術、豊富な知識を身に付け、広い形成外科領域の治療、教育、研究を進めていきたいと考えております。今後も若い先生に興味を持ってもらえる魅力的な教室作りに努めます。今後とも形成外科教室を宜しくお願い致します。

(玉井 記)

## 泌尿器科学

2018年7月に杉元教授が就任されてから4年が経過いたしました。コロナの影響が続いており入局者の確保が難しい状況となっておりますが、本年度は少し落ち着いている状況を見計らって、県内外で初期研修を行っている卒業生に対して積極的な勧誘活動を行っていきたくと考えております。また、コロナの影響で県内の医療機関の皆様と交流ができなくなったため、昨年には当科独自の広報誌『URO-info』を発刊し県内の医療機関に送付させていただきました。本年度も放射線科とコラボし「進化し続ける放射線治療」をテーマに大学で行っている前立腺がんに対する強度調放射線治療(IMRT)や小線源治療について紹介した内容で第二弾を発刊の予定です。対外的な活動としては、2023年2月に全国の泌尿器科医と病理医を対象とした第11回日本泌尿器病理研究会学術集会を当科で主催する予定となっております。当科では引き続き患者さん中心のQOLを重視した、逃げない、寄り添う医療を目指し、杉元教授のリーダーシップのもと精進していきたくと思いますので今後ともよろしくようお願い申し上げます。(岡塚 記)

## 脳神経外科学

脳神経外科教室は、2021年4月に三宅啓介先生が教授に就任され2年が経ちました。昨年度は残念ながら新規入局員はいませんでした。脳神経外科は忙しい、大変だというイメージが先行しがちなため、実際を知ってもらうための勧誘活動がコロナの影響で制限されてしまっていたこともあるかと思います。しかし、クリニカルクラークシップでの手術見学が再開となり、脳外科の臨床現場を体験することで、脳外科へ興味や魅力を持っていただいている学生さんも増えてきています。今後も三宅教授を中心に教員が一致団結して頑張っていく予定です。

臨床においては、これまで治療困難であった巨大脳動脈瘤や脳底動脈先端部の動脈瘤に対しても、血管内治療に用いるデバイスの進歩により現在は治療可能になっており、脳腫瘍に対する治療も悪性腫瘍に対して電磁波を用いた新規治療や、神経内視鏡も積極的に活用しています。またパーキンソン病などに対する脳深部刺激治療も再開しており、より充実した医療を提供できるよう努めております。そのため、ここ数年で順調に入院患者数および手術件数は増えてきております。研究分野では、脳腫瘍、中枢神経PET、脳卒中、救急など各分野において大学院生6名で様々な研究活動を行っております。「患者さま中心の治療」を念頭にこれからも精進してまいりたいと思います。フレッシュな顔ぶれとなった脳神経外科教室を今後ともよろしくようお願い致します。(畠山 記)

## 眼科学

2018年9月に鈴間潔教授が着任され、5年目になりました。網膜・硝子体外来、黄斑外来、緑内障外来、眼循環外来、斜視・弱視外来、涙道外来の専門外来を中心として、診療・研究・教育にあたっておりますが、今の体制になってだいぶ軌道に乗ってきたように思います。

昨年は思ったほどあまりコロナの影響は受けなかったのではと思っておりましたが、今年に入り、2月に病棟閉鎖が発生し、眼科病棟での新規患者の受け入れ中止や予定手術の延期、何人かの医師が濃厚接触者判定を受けて出勤停止になるという事態となりました。緊急度の低い白内障手術などの予約待ちが増えてしまいましたが、少しずつ予約待ちが解消され、最近になりようやく先が見えてきました。

今年は男女1名ずつ、2名の新入局の先生を迎えました。二人とも研修意欲に満ち溢れており、成長が楽しみです。医局会中での抄読会や研修医講義でも積極的に質問して知識を深めています。

昨年度は11月に准教授・白神千恵子先生、1月に第2代教授・白神史雄先生が相次いでご逝去されるという悲しい出来事が続きましたが、こうして順調に入局者が増え、若い世代が成長し、日々前向きに頑張っております。今後とも眼科学教室をよろしく願い申し上げます。(山下 記)

## 耳鼻咽喉科学

星川広史先生が教授に就任して7年がたちました。今年は新入局員にこそ恵まれませんでした。若手は順調に育っております。夏に行われる耳鼻咽喉科専門医資格試験では、今年には戸田先生、西岡先生、三村先生の3名が受験する予定です。どの先生も優秀で、この冊子が発刊されるころには専門医として一皮むけた存在になっていることと思います。

また2021年秋から三豊総合病院への常勤医師派遣が再開され、印藤先生、西岡先生が西讃地区を守ってくれております。手術件数もすこしずつ増やしていく予定であり、お近くの先生はお困りの症例などありましたらぜひご相談ください。

近年、耳鼻科界隈では感覚器リハビリテーションを推進するうごきが活発化しております。我々の地方部会でも、前庭・聴覚・嗅覚、嚥下リハビリのワーキンググループを設置して準備を整え、地域医療により貢献できる体制づくりを目指してまいります。今後ともよろしく願い申し上げます。(高橋 記)

## 放射線医学

西山佳宏教授となり、今年度で15年目となりました。

4月に新入医局員(後期研修医)として、今上恵理先生、村尾光優先生、真鍋悠利先生の3名が入局され、若い力が充実してきております。また今年度4月に遠迫先生と内ノ

村先生が香川労災病院に赴任しました。

若手から中堅の先生も順調に成長し、藤本先生が昨年度「放射線診断専門医」を無事取得し、活躍されています。

当科では今までも甲状腺癌治療後や転移などへのヨウ素内用療法と、去勢抵抗性前立腺癌骨転移治療薬による<sup>223</sup>Ra療法を行ってきました。これらに加え最近新しく、ソマトスタチン受容体陽性の神経内分泌腫瘍に対する治療薬のルテチウムオキソドトロチド(ルタテラ<sup>®</sup>)と、MIBG集積陽性の治療切除不能な褐色細胞腫・パラガングリオーマに対する治療薬の3-ヨードベンジルグアニジン(ライアット<sup>®</sup>)の二つの治療用放射性医薬品が発売され、当科においても今年度中に治療の導入を計画しています。この新たな治療導入に向けて治療実績のある施設に、医師だけではなく看護師や診療放射線技師が合同チームとして見学に行き研修を行ってきました。

これからも当科では、「患者さんに寄り添う放射線診断や治療」及び「放射線診断へ様々なアプローチによる探求」を行っていきたく思っております。(室田 記)

## 麻酔学

麻酔学講座では白神豪太郎教授のリーダーシップのもと、医局員一同、麻酔・周術期医療、集中治療、ペインクリニック、緩和医療など幅広い分野で診療、教育および研究に精励しております。今年度、当教室の山鳥先生が医学博士号を取得しました。また、白石先生が新たな麻酔科専門医の資格を取得しました。

今年度も引き続き外科系の各診療科のご協力をいただき、深く感謝しております。今年度は多数の研修医の先生方が麻酔科での研修にきていただけるようになり、すこし活気が出てきたと感じております。相変わらず実働麻酔科医の不足が続いている状況ではありますが、実働人数が増加したことにより昨年よりさらに麻酔科管理手術枠の増枠が可能になりました。また、COVID-19流行の状況も少しずつ落ち着いてきており、手術制限がかかることもありますが、手術や学生実習もコロナ流行前のように行われるようになりつつあります。

今年度は特に、学生、研修医の教育、実習に力を入れており、各種シミュレーション機器を使用しながらの教育を取り入れております。若い学生や先生が興味を持ち、入局してもらえそうな麻酔科の魅力を伝えていければなと思っております。

今後も診療、教育、研究に精一杯貢献していきたく存じますので、関係各所の皆様にはなお一層のご支援の程をよろしく願いいたします。(北村 記)

## 救命救急医学

救命救急センターでは、黒田泰弘教授が教室を率いて13年目を迎えました。

4月からは後期研修医の片山先生、脳神経外科より武澤

先生を迎え、新たなスタートを切りました。引き続き脳神経外科や各科より応援の先生を派遣頂きまして日々の診療に取り組んでおります。COVID-19の流行や救急専従医の減少など厳しい状況は続きますが、香川県最後の砦として、県内の重症患者に対する集中治療・外傷診療・神経救急／神経集中治療をメインに日々臨床・研究に取り組んでおります。

今年度からは47都道府県最後の導入となるドクターヘリ事業がついにスタート致しました。これからは病院前診療の面からも香川県全体の救急医療に貢献できるよう精進してまいります。また、関係各科の皆様・讃樹會の皆様のご支援なくして救命救急医療は成り立ちません。今後とも密な連携を図れればと思いますので、より一層のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。(梶原 記)

## 歯科口腔外科学

歯科口腔外科学教室は、三宅 実教授が教室責任者として8年目を迎えました。大林由美子准教授が3月で退官し、8月より新たに香川県立中央病院より助川信太郎准教授を迎えました。またGuo Yiman、中井康博、伏見麻央の3名が学位を取得しました。新たな関連病院として高松赤十字病院に宮脇、愛媛県口腔保健センターに南を派遣しました。また独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター歯科口腔外科に岩崎、かがわ総合リハビリテーションセンター病院歯科に伏見、芳地、和歌山県田辺市紀南病院に高尾が出向しております。

当科では口腔腫瘍や顎変形症、歯科インプラントなどの幅広い口腔外科手術を行っております。マイクロスコープを用いた歯根端切除術や唾石摘出術、顎欠損に対してインプラントを用いた咬合再建など、大学病院ならではの個々の病態に応じた最善の治療を提供しています。がん患者等の周術期口腔機能管理も多くの診療科から紹介をいただいております。

今後も香川県内の歯科口腔外科診療における基幹病院として、チーム医療の充実やリサーチマインドをもった医療人の育成に邁進してまいります。(中井 記)

## 内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学

内分泌代謝内科は村尾孝児教授のリーダーシップのもと、一致団結して臨床、研究、教育に励んでおります。幸い、当科では村尾教授が就任以降、毎年新規入局者を迎えることができ、女性医師も多く入局しております。2021年には内分泌代謝科専門医を1名が、糖尿病専門医を2名が修得いたしました。2022年3月には1名が医学博士号を修得しました。今後もより一層内分泌代謝学の魅力を伝え、さらに働きやすい環境を整えてまいります。診療面では2018年度以降は外来患者数が毎年1万人を突破しており、入院患者数も増加しております。対外的には、希少糖臨床応用についての共同研究・開発を香川県・国際希少糖教育

研究機構・地元企業と産官学一体となりプロジェクトを進めております。その他、かがわ糖尿病療養指導士育成事業や世界糖尿病デーイベントなど多岐にわたるプロジェクトを展開しております。これからも皆様から信頼される内分泌代謝領域の診療を行い、香川県の内分泌代謝学の発展に貢献できるように精進してまいりますので、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。(佐伯 記)

## 臨床腫瘍学

近年、がん診療はがんを標的とする分子標的治療の進化、がん免疫療法の登場、ゲノム解析によるがん個別化医療など新たな時代の幕開けを迎えています。2015年2月の講座新設以来、臓器横断的ながんの集学的治療をはじめ、地域連携、がん予防の啓発、支持療法・緩和ケアの推進とともに、治験や多施設共同の臨床試験による先進的な診療に力を入れていきます。

2019年には、附属病院スタッフの皆様や学内の関係講座の皆様のご協力・ご指導のおかげで、四国の大学病院としては初めての、がんゲノム医療拠点病院の指定を受け、がんゲノムによる精密医療の実践に踏み出しました。本年度は昨年度よりもさらに多くのがん遺伝子パネル検査を実施しており、今後がん患者さんや地域の方々に最良で最新のがん診療を提供していきたいと考えています。また、近年は希少がん(肉腫・神経内分泌腫瘍・原発不明がんなど)診療にも力を入れており、さらに治験や多施設共同臨床試験などの新規治療開発にも取り組んでいます。

今後もよりよいがん診療を行うために努力してまいりますので、皆様の引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。(奥山 記)

## 総合診療医学

総合診療医学では4人のスタッフがそれぞれのSubspecialty専門領域(循環器、消化器、脳神経内科)を生かしながら総合内科として診療を行っています。発熱、全身倦怠感、体重減少など受診時にはすぐに診断がつかない患者さんを対象として診断、治療にあたっています。大学病院は全診療科が専門医の集団ですが、その中でこそ総合診療的な診療が必要な場合もあり、当科が果たすべき役割と考えています。

2018年から新専門医制度が開始され、本教室では「香川大学総合診療専門研修プログラム」を作成し、大学病院と香川県内の地域の病院とをローテーションしながら総合診療専門医資格を取得できるプログラムを用意しています。研究面では各スタッフが専門領域に基づく研究を行い学会発表、論文執筆を行っています。

診療、教育、研究面での本教室の役割を果たせるよう努力してまいりますので今後ともご支援をよろしくお願いいたします。(舩形 記)

## 放射線腫瘍学

2012年1月の活動開始以来、「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げています。放射線治療専門医・指導医として柴田教授・高橋助教が、放射線科専門医として穴田医員・西出医員が常勤しています。

臨床面では、前号の同窓会会報でご紹介した新放射線治療棟において、最新の治療機（リニアック）が2022年5月から稼働しております。これまでも強度変調放射線治療（IMRT）・画像誘導放射線治療（IGRT）等に積極的に取り組み、前立腺癌や頭頸部腫瘍だけでなく、脳腫瘍や子宮頸癌に対するIMRTの実績を増やし、通常照射・定位照射（いわゆるピンポイント照射）・小線源治療等と合わせ、年間450例前後に治療を行い、診療報酬の増収を達成していました。これからは転移性脳腫瘍への定位照射、肺癌に対するIMRT等の実績を増やしていきたいと考えています。

研究面では、科研費にも採択されており、国内外の学会や英文論文で成果をコンスタントに発表しています。

皆様には臨床や共同研究でお世話になっておりますが、引き続きのご支援をよろしく願いいたします。（高橋 記）

## 医療情報学

昨年度は、日本医療情報学会の春季学術大会を主催することについて、準備の苦悩を書きましたが、6/30～7/2の3日間、ハイブリッド形式（現地＋ウェブ）で行いました。思ったとおり、費用はかさみましたが、1900名近くの方が参加して下さり、コロナが下火の時期でもあり800名以上が現地（岡山）においで下さいました。その結果、現地での出展やセミナーを企画した企業さん達は大変満足して下さい、多くの参加者からもお褒めの言葉を頂き、盛会のうちに終了しました。この学会ではテーマを「ビッグデータ再考」としておりました。私自身、様々なビッグデータ研究に関与していますが、そのデータの質をきちんと見極めないときちんとした結果が出ないことを痛感しています。そのような観点から、厚労省・内閣府などからデータ利活用の担当官をお呼びして、現状とその打開策を議論したセッションは好評でした。今後どのように研究データを扱うかなど、色々な議論ができたと思っております。同窓の先生方もデータベース研究をする際には当方にご相談下さい。何かのお役に立てればと思っております。（横井 記）

## 薬剤学

薬剤学教室では、従来より安心して安全な薬物療法の支援を行うために、TDM解析手法の探索、抗がん剤の副作用評価、医療安全に係る薬剤システムの開発などをテーマに研究を行っています。今後の展開として、臨床薬学の知識・技術を駆使した新医療システムの構築や社会的要求の高い医療連携についての研究により、地域医療に貢献できるよ

うな業務展開を進めたいと考えています。

すべての医療者が適正な薬物療法を実践出来るように、学部生、大学院生への教育支援も行っておりますので、「讃樹會」会員の皆様には広くご指導ご支援ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。（小坂 記）

## 健康科学

香川大学医学部医学科同窓生のみなさま、いつもお世話になっております。

2022年4月より健康科学准教授に着任しました加藤育子です。香川医科大学を平成14年に卒業し、多くの時間を香川大学小児科にて小児科医として勤務してきました。

現在、健康科学講座では産婦人科医師である塩田敦子教授と加藤の女性医師二人体制となりました。看護学科において、学部教育では医学に関する基礎知識を深める役割を担っており、大学院では助産学をはじめとした教育や、臨床経験をもとに女性医学や漢方、乳幼児発達学、授乳に関する研究指導を行っています。今年度より博士後期課程が設置され、さらに発展した研究・教育が行える環境が整いました。

医学科、臨床心理学科も含めた医学部三学科とつながりを持つ講座であることより、連携を生かして幅広い専門知識や人間性をもった看護師、助産師、看護学修士、看護学博士の育成に努めてまいります。どうぞよろしくお願い致します。（加藤 記）

## 病理診断科・病理部

香川大学医学部医学科の同窓会のみなさま、こんにちは。香川大学医学部附属病院病理診断科・病理部です。私たちは病理医7名、臨床検査技師9名、事務2名で毎日働いています。患者さんの体から採取された胃生検や手術検体などの組織診、手術時の術中迅速診断、尿や子宮頸部からの細胞診、不幸にして亡くなられた方の剖検など、仕事は多岐にわたります。また、初期臨床研修医やスーパーポリクリの学生を受け入れており、卒前・卒後教育にも力を入れています。病理診断は最終診断です。治療方針の決定に大きく関与しており、迅速で正確な診断が求められます。プレッシャーを感じることもありますが、臨床的に鑑別診断に挙げられていない疾患を診断できたときはとてもやりがいを感じます。一見、何をしているか分かりにくいと思いますが、自由に入出入りできますのでぜひ一度遊びに来て下さい。病理診断科・病理部一同、お待ちしております。（香川 記）

（香川 記）

## 編集後記

2022年も早や8月と下半期に突入し、先生方も日々の診療で忙しい日々を送られていることと思います。2020年1月以来編集後記を担当させていただくことになりました。当時はCOVID-19感染が日本で初めて診断される直前であり、その後の約2年半がこのような状況になるとは夢にも思っておりませんでした。

世間ではCOVID-19感染者数も第7波のピークを迎えるものの、少しずつアフターコロナを見据えた動きが出てきているように感じます。今年は3年ぶりに行動制限のない夏休みを過ごすことができました。テレビで見るスポーツや音楽のイベントにも多くの観客の姿が見られるようになってきています。海外からの入国制限も緩和され、世界との交流も少しずつ回復してくる兆しを感じられます。

さて、第17回定期総会では平川栄一郎先生の会長ご就任と、会報でご就任のあいさつを頂きました。同窓生教授就任挨拶を、平成15年卒の岩部真人日本医科大学大学院教授よりいただきました。讃樹會も、明るい話題の多い一年になることを期待したいと思います。さて、ニュースの窓では「坂東先生のベストティーチャーのコメント」や「教室便り」が掲載されていますので、ご一読ください。また、関連病院紹介では、高松平和病院の特集を掲載しています。

私とはいうと、COVID-19感染に注意を払いながらではあるものの、消化器内科医としての診療や学生の勧誘、学会発表や論文作成などこの2年間制限を受けていた分を少しでも取り戻すべく色々な取り組みを始めています。この9月に高松でハイブリッド開催される国際学会APASL oncology 2022の事務局長を拝命し、英語に不安を感じつつも発表以外での他施設の先生方との交流も楽しみにしています。

毎号のことながら、ご多忙中にも関わらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。更に親しまれるような紙面になるよう、微力ながら努力してまいります。些細な事でも結構ですので、ご意見ご提案がございましたら宜しくご意見申し上げます。

広報局長 谷 丈二 (平成14年卒・17期生)

## 事務局からのお知らせ

【連絡・問い合わせ先 TEL 087-840-2291】

mddousou@kagawa-u.ac.jp

- ◆医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています（途中加入ができます）。詳細は事務局にお問合せ下さい。
- ◆国外留学助成金の募集を再開しました。詳しくはHPを参照下さい。
- ◆研究助成金／研究奨励金の申込締切は毎年4月末日です。ふるってご応募下さい。

## 訃報

名誉会員

河西 浩一先生 2022年8月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## TOPICS

讃樹會シンボルフラッグが出来ました。大きさは「縦90cm×横135cm」となります。2017年に理事会で発案され、定期総会やアンケートを経て、今年度の第17回定期総会でデザインが決定しようやく完成しました。

讃樹會では、ブルネイ・ダルサラーム大学やイギリスのニューキャッスル大学など香川大学の国際交流協定校へ医学部医学科学生が留学する際に、助成金を支援することで学生の留学を後押ししています。その一方で、協定校から短期留学生や教官が訪日した際に、歓送迎会等への援助も行い、医学部の国際交流推進に寄与しています。学生時代から世界を活躍の場ととらえる広い視野をもってほしいということで、讃樹會ではこれからも国際交流への助成を続けていきます。

このシンボルフラッグは、主に国際交流などへの助成事業の機会をとらえて使用する予定です。

新型コロナウイルス感染症の蔓延により、国家間の留学はここ数年中止が続きましたが、今年から少しずつ状況を見て再開されつつあります。

医学部カラーである赤の2本線と讃樹會の題字のインパクトあるデザインは、医学部学生はもとより、海外から来日する留学生の方にも十分アピールできるものと思われます。

